

俳句雑誌

令和七年十二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第十二号

水 明

2025 12月号



《今月のかな女》

除夜の鐘なるやいつまで浸かる風呂

『龍膽』所収 大正七年

長谷川かな女

俳句の面で、また、家庭内のことでいろいろと多忙な一年であつたが、どうやらそれ等の雑事から解放され、新年を迎える準備も整つた。除夜の鐘を聴きながら、仕舞風呂に浸かつて手足を伸ばしているかな女の姿が見えてくる。

NHKの紅白歌合戦の後の除夜の鐘が大晦日の音に似つかわしいが、数年前から都会地では朝夕の時の鐘は無論のこと、除夜の鐘までも撞かぬようになり、一抹の淋しさがある。しかし、この句のような時代に還つたと思えば、かえつて大晦日の情趣が濃くなるのではなからうか。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

秋簾巻く手に残る日の温み

茂木和子

季音月

箱馬車の轍恋しや赤とんぼ

青木鶴城

季音花

秋高し機影に確とJALマーク

笹本啓子

水明競詠

唐辛子孤食の舌を刺しにくる

松井由紀子

鼓笛集

ことごとく試す地酒や海鼠噛む

秋谷風舎

水 明

令和 7 年
12 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

小 晦 日 (作品)

侍 の 坂 (近詠)

人 の 心 (近詠)

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

ゆ ず り 葉 雪季月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

水明と私

自選五十句

史代頌

生ある限り

永野史代の一句

集 特 家 作
代 史 野 永

山本鬼之介

大橋廸代

星野和葉

染谷風子

檜鼻ことは

茂木和子
森本早苗
森川義子
ほか

青木鶴城
日高道を
大場順子
ほか

笹本啓子
保坂翔太
横山君夫
ほか

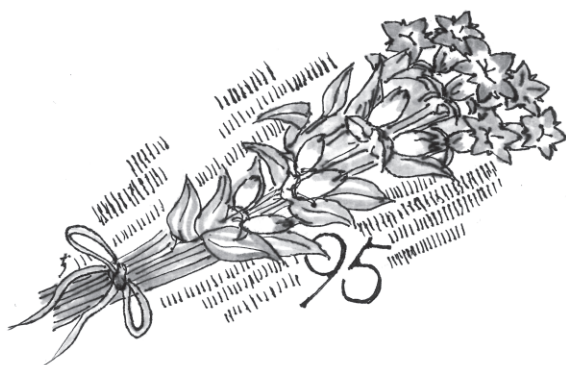
浦川聡子

網野月を

永野史代

網野月を

大村節代



水明競詠

松井由紀子
菅原卓郎
石川理恵
ほか

水 琴 窟（水明集九・十月号鑑賞）

池田雅夫

62

鼓 笛 集

梅澤輝翠

64

俳誌望見

菅原卓郎

66

句集喝采

青木鶴城

67

りんどう忌の記

新珠賞作品募集・新春大会のお知らせ

70・73

水明例会報・各地句会報

例会・句会の指導者および幹事会のお知らせ

79

新珠賞作品募集・新春大会のお知らせ

発展基金御礼・風声

80

後記

題字・長谷川かな女
表紙・内田恵子
カット・福田千春

小晦日

山本鬼之介

羽衣の松よ畏き新松子

道行の濡場に笑ひ村歌舞伎

つるべ落しの交番仕切る巡査長

独 り 酌 む 粹 酒 「 加 賀 鳶 」 こ つ ご も り	雪 も よ ひ 想 ひ は 遠 き 鷹 ^{たかが} 峯 ^{みね}	瓦 斯 燈 の む か し を 偲 ぶ 枯 柳	相 傘 の 人 の 背 丈 や 夕 時 雨	ハ モ ニ カ に 聴 き 入 る 浜 辺 秋 惜 し む
--	--	--	---	---

侍 坂

大橋 勉 代

参道の木の实ひろふや校チャイム
百八段あふぐ顎へ蚊の名残
秋高し侍坂へ勇み立つ
楼門よりきらきら秋の片男波
赤とんぼ天女の笛にホバリング
甲冑に弾痕あまた雁の声
竜淵に潜みからりと男坂

紀州東照宮の侍坂は、頼宣公自ら指揮をとり藩士らが築いた百八段だ。意を決して登りはじめると百三十キロはありそうな男性が、上段からソロソロリ。「どちらから？」と訊ねると「静岡です。御親戚に挨拶を」と言う、思わず「お気を付けて」に「頑張って下さい」とエールを交換。中程で一息つき登りきつた。てっぺんから手を振れば彼も又手を振り応えてくれた。金風の侍坂をまだ登れたと心地よい汗を拭きつつ楼門の壁画を楽しんだ。

人の心

星野和葉

気心の知れたる友よ小鳥来る
季外れの月下美人に励まさる
色かたち告げて仏花に実紫
庭に鴉今日は友とし次郎柿
母の顔口ぐせ思ふ柿なます
ひつそりと秋明菊の佇まひ
他人の手人の心や秋深む

長かった夏、秋は何処へ？と思っ
ているうちに、急に涼しく又寒くな
り雪の知らせまでがちらほら聞かれ
るようになった。
常日頃、転ばぬようにと自覚し友
や娘たちからも確と言われていた。
それなのにどうした事か、急に足の
筋肉の痛みで歩行が困難になった。
夫の残したステッキのお世話になっ
たが、使い方すら分からずまごまご
した。どうやら一ヶ月程過ぎて大分
楽になった。

何がいけなかったのか、何か足り
ないものがあつたのか、じっくり考
えながら前に進もうと思っている。

雪 嶺

● 季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇移り香（八月号）

町野 広子

ステッキの紳士薄暑の街闊歩
麦秋や老舗の宿に水墨画
卯浪立つ私軒をかくらしい
青嵐人の噂のふらくしみぬ
指先に移り香紫蘇の葉摘みにけり
卯焼焼海苔納豆宿浴衣
明日去ぬならば手火花全部やつちまへ

添えられたエッセイの結尾に「暫し幻想の世界に浸ろう」とある。筆者もこの意に添い自由な鑑賞を進めたく思う。一句目、亡くなられたご主人の回想か。上等なウール仕立の背広に英国製のステッキで銀座を闊歩する姿が目につかぶ。二句目、五月下旬の麦秋頃のご主人との二人旅。宿は老舗の日本旅館。床の間に掛かる水墨画がこの宿の格式と伝統を示している。水墨画は禅宗趣味と関連して室町時代に最も栄え、雪舟によって大成した。油絵では宿の高級感も表現出来ない。三句目、卯浪の音を超える程の作者の軒に苦笑されるご主人が目につかぶ。五句目、九音・九音で中七の真ん中で切れる句。移り香の理由は紫蘇の葉を摘んだからという気付きの『けり』の使い方がうまい。六句目、朝食の定番を漢字のみで表現。七句目、下五の「やつちまへ」に作者の性格と心意気と若干の淋しさが感じられる。愉快且燦銀の如き七句である。

◇有馬念仏寺（八月号）

森本早苗

魚板打ち案内を待つ沙羅の寺
本堂も奥の茶房も扇風機
沙羅落花黙座して待つ寺の床
沙羅落花蛤石に飛び石に
雨を乞ふ沙羅一輪を大寫し
沙羅愛でつお寺カレーに舌鼓かな
涼やかや信楽焼の水琴窟

作者近郊の有馬温泉念仏寺の吟行句。有馬温泉は、『日本書紀』に舒明天皇行幸の記載もあり、古来より数多の著名人に愛されてきた名湯である。今も関西の奥座敷と称されている。念仏寺は浄土宗で、慶長年間、豊臣秀吉の正室北政所（ねね）の別邸であった現在地に移転した。添えられたエッセイによれば、有馬念仏寺は樹齢三百年余の沙羅双樹と限定十食のお寺カレーが名物とのこと。一句目、魚板を打ち案内を乞う寺に歴史を感じる。三、四、五句目は沙羅の白い花の落ちしきる日本庭園を愛でつつの写生句。六句目、沙羅の花を愛でつつの名物カレーの味はまた格別であろう。秀吉の正室（ねね）は十四歳で秀吉に嫁ぎ、糟糠の妻として内助の功大で、秀吉の生母にもよく孝養を尽くした。秀吉没後落飾し高台院と号した。豊臣家の滅亡を確と見詰め、「沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理」を生き抜き寛永元年七十七歳で没した。

◆煉瓦の街深谷（九月・十月合併号）

井上燈女

どの家も家号がありて梅雨瓦
青淵の威風堂々と額紫陽花
新涼や駅百選の赤煉瓦
引き込み線の跡は歩道や花木檜
雲の嶺ホフマン窯に人容れず
噴水の折れ易き秀や夕風に
ホフマン窯に栄一忍ぶ大暑かな

作者は深谷にお住まいだ。筆者と水明熊谷句会で席を同じくしている。現在、健康上の都合により欠席投句が続いているが、毎回力強い秀句を出句される。今回は渋沢栄一と同氏が設立した日本初の機械式煉瓦工場を詠んだ七句である。一句目、栄一は武州榛沢郡血洗島（現深谷市）の豪農に生まれた。村には十数戸の渋沢家があり、栄一の家は「中の家」と呼ばれた。二句目、生家の庭に「青淵」と号した若き日の栄一の威風堂々とした銅像が立っている。三句目、深谷駅は東京駅を模した赤煉瓦造りである。赤煉瓦が未だ新しく、明治の文明開化の雰囲気を感じている。東京駅丸の内駅舎、法務省旧本館、迎賓館等皆深谷の煉瓦が使われた。五句目、日本煉瓦製造の旧工場跡は現在歴史資料館となっており、ホフマン窯は修理工事のため閉鎖され中に入れない。令和九年中に公開予定だ。栄一は若い時高崎城を襲い武器を奪って横浜外人居留地焼打ちを計画した尊王攘夷派だった。計画を断念し京に出奔中に知人の平岡円四郎の推挙で一橋家に仕官した。参考：長谷川伸『相楽総三とその同士』の一読をお勧めする。

◆晩夏光（九月・十月合併号）

松井由紀子

鰐広の何処に置こうか夏帽子
夕あかり破れ囲を揺らす黄金蜘蛛
二千歩の出会い目の合ふ青蜥蜴
初秋や風を見たくて拭くガラス
初鳴きのちろろ長編の終章
秋分に生まれ変化の雲が好き
再会はず挙ぐる手晩夏光

作者は二科展に連続十四回、サロン・ドートンヌに連続三回入選し現在サロン・ドートンヌ会員の洋画家である。サロン・ドートンヌは毎年パリで秋に開催される美術公募展で、一九〇三年マチスやルオーにより創立された歴史と伝統のある団体である。藤田嗣治も岡鹿之助も会員だった。添付のエッセイによれば、八十二歳で俳句を始め作句が生き甲斐とのこと。一句目、お洒落な鰐広の夏帽子を被り、パリ街中の散歩の一齣か。三句目、不思議な魅力ある句だ。「二千歩の出会い」とは何か。青蜥蜴は尾が鮮やかなコバルトブルーで毒を持つ。筆者は蛇に似た蜥蜴の目に恐怖感を覚える。画家の感性は凡人と違う様だ。四句目、風の音に立秋を感じたのは藤原敏行である。作者は初秋の風が見たくてガラスを拭く。鋭敏な画家の目だ。五句目、ちろろは秋に鳴く虫の中で最も普通の虫で、初秋から秋遅くまでその声が聴かれる。ちろろの初鳴きから長編の叙事詩の最終章まで飛ぶ作者の発想には脱帽だ。七句目、ひと夏の避暑地の出来事とその別れか。映画のラストシーンを彷彿させる。作者の益々のご健吟を希う。

ゆずり葉

◆季音九・十月

檜 鼻 ことは

鰻食ぶ「う」の一文字の藍暖簾

町野 広子

「鰻」でも「うなぎ」でもなく、平仮名の「う」とだけ染め抜かれた藍暖簾。きつと老舗の鰻屋さん。この簡潔さは圧倒的な存在感をもち、通りを行き交う人々に「ここは鰻屋だ」と一目で知らせる力を放っています。「う」の一文字の藍暖簾は、夏の強い日差しの下、涼やかさに格式を帯び、このようなお店を見つけたら暖簾をくぐらずにはいられません。鰻の肝煮と骨煎餅で先ず一献を楽しんでから、いよいよ鰻重をなどと妄想がひろがってしまいます。

掲句の「鰻食ぶ」という単刀直入な言い切りがとても力強く、さぞや美味しい鰻であったことでしょう。さて、何処ぞの鰻屋さんなのでしょうか。今度お会いした時に、是非、お伺いしなくては。

青僧の東司当番梅雨晴間

石山かつ子

曹洞宗大本山永平寺にお参りした時、僧堂（坐禅堂）、浴司（浴室）、東司（便所）の三つを「三黙道場」と言い、これらの場所は特別な修業の場であるという道元禅師の教えを伺ったことがあります。東司で用を足す行為は、単なる排泄ではなく、心身を清めるための大切な修業であることから、永平寺では用を足す際には法衣を脱ぎ、整えてから入室するなど細かい作法が定められています。

排泄は大切な命の営みのひとつであり、修業の場でもある東司は常に清浄な状態に保っておくべき場所。禅寺での東司当番は、我々一般人が考える便所の掃除当番とはその意味がいささか異なるような気がいたします。

梅雨晴間。長雨のさなかにふつとのぞく晴れ間は、湿った空気の中に光が射しこみ、気分もどこか解き放たれるような明るさを持っています。掲句に詠まれた青僧は、東司当番の務めを終え、きつとそのような気持ちになったのではないで

しようか。

湖北 仏守る農民夏榎

大塚茂子

琵琶湖の北東に位置する湖北は静かで落ち着いた地域です。平安時代、湖北地方には、天台寺院が数多く存在しましたが、その内多くは、室町・戦国時代に衰退し、無住・廃寺となりました。しかしながら、そこに残された尊像は、宗派の枠にとられず村の守り本尊として、村人たちに大切に守られてきたということです。

「観音の里」と呼ばれる地域もありますが、それは、観音像を献身的に守り継いできた村人の仏への慈しみと親しみ、信仰が今でも残っているからでありましょう。

作者は初夏のころに、この地を訪れたのでしょうか。余呉、木之本、そして高月と時間が許せば、何度でも訪ねてみたくなる地域です。榎は夏になると大きな木陰を作ってくれることで知られる樹木、夏の旅人のしばしの休息の場所となったことでしょう。柔らかな余韻が残る一句です。

朝焼は母よ夕焼は父の色

正木萬蝶

朝焼けの空は柔らかく、陽の光はやさしく一日の始まりを告げるかのようにです。母の懐かしい声や、包み込むようなやさしさを思い出しながら、そのぬくもりを朝の光に探してい

らっしゃったのでしょうか。そして、夕焼けは父の色。夕焼けの空は全てのものを見守るようにあたたかく、力強くも寡黙で家族を支えてきた父の姿を見るかのようにです。

朝焼、夕焼という自然現象を父母の姿に重ねつつ作者自身の追慕の情が詠み込まれ、胸に染み入るような余情を感じます。自然界の姿と人の心をつなぐ優しい調べ、心に留めておきたい一句です。

満開の小梨の花に雨やさし 目頭に青葉しぐれのひと雫

池田珪子
下川光子

梨の花は日々の生活とともにある春の花。日々の暮らしに寄り添うような優しさをもつ花です。満開の小梨花の措辞に今か今かと待ち望んでいらつした作者の喜びを感じます。その小梨の花に降る雨は、慈しむようなやさしさをもった雨として詠まれています。「やさし」という言葉がとても清らかで、穏やかに、花を撫でるように降る小雨の情景を伝えてくれます。

こうして、両句を並べて読むと、季節の連なりと生命の清らかさが、小梨の花にも静かに息づいていることがわかります。自然に抱かれ、どちらの句からも静かに伝わってくるのです。

季音雪

秋色 茂木和子

故郷に父一人住む萩の風
翔つ鳥の銀色放つ秋の朝
梨狩やかすかに望む秩父嶺
梨狩の子に先生が手を貸しぬ
秋簾巻く手に残る日の温み

夕月夜 森川義子

追ひ越せば他人の空似夕月夜
山寺の急なきざはし萩の花
燕帰る水上バスの擦れすれに
薄れ行く昭和なつかし衣被
衣被湯気もろともに供へけり

摩耶山天上寺 森本早苗

赤とんぼ真つ赤な爪の摩耶^ま夫人^{ぶにん}
白風に鳴る水子地藏のかざぐるま
コスモスや水子地藏に眠気差す
嫺やかなアサギマダラや藤袴
海渡る蝶の群がる藤袴

グローブ 網野月を

秋気澄む 井上燈女

秋草や無茶を承知のマキユーシオ
コーデリアの臉に霽れや蛇の目花
武時の矜持あらたに浅茅花
萩の声映えるポーシャのネックレス
ファルスタッフの長広舌や月見草

もう一步一步踏ん張る夜長かな
一つ灯を分かつ者なし夜の長し
秋暑し子に付き添はれ大会へ
皆様に逢えた幸せ秋気澄む
座右の書にかな女の一書りんどう忌

家路 石井喜恵

酔徳利 石山かつ子

リズム良く刻む俎板秋の朝
身に入むや音をたてずに吞むスー
日の名残り風の名残りや秋簾
宵闇の草の湿りを踏む家路
人影の相寄る窓辺十三夜

米蔵の並ぶ川筋菊脰
菊脰振つて注ぎ足す酔徳利
芋虫の反つて転げて反抗す
木道の乾く早さよ天高し
鳶の輪に烏も入り天高し

雁 大橋 廸代

屋久島へはやる舳先や雁の列
かりがねや侍坂を登りきる
沼の入り日へ一直線の雁の棹
しんがりは手負ひの雁よ沼落暉
白き角たしかめたくて鹿園に

秋 大村 節代

お洒落にも八十路の見栄よ秋の原
弁当箱に梅干の種秋高し
クレヨンで夕紅葉描く山の宿
パンで消す素描の自画像そぞろ寒
木道は一人の幅よ秋の空

啄木鳥 菊池 ひろこ

啄木鳥や影絵となりぬ生家の樹
生地ここ日差しへかざす芭蕉の葉
午後の雨いつも大粒芭蕉池
放生会桶の香混じる池の夜
部屋隅に置かれし処暑の旅道具

逍遙 五明 昇

遠山に雲新しき秋の朝
間合よき北信五岳秋高し
身構へて一笛を待つ踊連
野分あと名残波衝く巡視船
桐一葉敵味方なき武将塚

剃刀鈍るなま

境 延 昭

秋の燈 鈴木康世

剃刀の鈍る朝の秋暑かな
秋夕焼老ゆれば募る里心
良夜かな眺むるだけの月でよし
今さらの男系男子いほむしり
窯元に壺の大小乱れ萩

萩と月 島津初花

お茶室の飾り窓から萩を見る
紫の萩に触れゆく女坂
山門へ白萩垂るる夕明かり
真夜中の窓一角に月満つる
行儀良き月見の客となりし母

可惜夜や昭和を語る秋灯下
秋ともし外湯めぐりの下駄の音
秋ともし地球儀廻しニュース聞く
秋の燈の点りて番屋音の無し
ただそばに居てくれた人秋灯下

新涼 十倉和子

新涼や遠山の青空の青
今朝秋の鶯張りの長廊下
ずつしりと脇差ほどの初秋刀魚
自動ピアノの鳴り出すホテル星月夜
満月や遙か撥ねしは鯨の尾

大 根 鳥羽和風

大根切る嘘偽りの無き心
大根の瑞瑞しさを軒に吊る
望郷の腹に染み入る煮大根
幸せな人生でした煮大根
大樽に僧の足踏み沢庵漬

揺れどほし 永野史代

秋の蝶しばし止まりて母の墓
枕辺にかすかに入りぬ萩の風
雨降らば雨に身を伏せ萩の花
天より降り来盆入りの黒揚羽
萩の風わが身はいつも揺れどほし

般若経 星野和葉

古墳群見てより萩の風の中
川に沿ふ廃線さびて萩の声
色こそは将に男よ長十郎
皮薄き二十世紀よ女肌
桐一葉朝より流る般若経

ベビー靴 町野広子

萩の風螺旋で登る展望台
ささら萩羽根のやうなるベビー靴
秋蝶の止まる気配もなく舞へり
東京の屋上庭園赤とんぼ
眠らない街の一隅銀杏散る

秋 茄 子 松 井 由 紀 子

思ひ出と歩く無辺の良夜かな
秋霖のポストへ返す誤配便
三十三回忌の母へ香るや金木犀
やや寒や思案顔して坐る猫
秋茄子を食めば命のまだ惜しく
月欄より

紅葉に染まる 田 中 章 嘉

観賞のどの紅葉とて心留め
滝音も朝日に映えて紅葉中
静寂の紅葉に染まる鳥の声
夜這星西に東に身を燃やし
初恋に破れて飛ぶや流れ星

花欄より

加 冠 の 儀 高 橋 満 耶 子

「加冠の儀」の成人式や秋気満つ
冠の紐切る音や秋気澄む
雁渡る赤城の山の名台詞
「リレー侍」の悔し涙や秋の雨
女性初の総裁なるや秋麗
花欄より

秋 気 澄 む 葛 城 千 世 子

起きてすぐ弁当作り寒さやや
秋気澄むつつ立つてゐる調査員
秋気澄むばつたり出会ふ古き友
フェニックスの地層の岩や雁渡し
花展中木いちごの実の色きざす

季音月

名残 青木鶴城

地球めらめら新涼とは名ばかり
旋回に惜しむ名残や秋燕
箱馬車の轍恋しや赤とんぼ
秋澄むや門を閉ぢたる剣が峰
まなうらに父の在りし日鰯雲

秋灯下 大場順子

関八州ひつくり返し野分過ぐ
高らかに間歇泉や野分晴
「海潮音」繰れば青春秋灯下
「項羽」今四面楚歌なり秋灯下
久闊を叙する湯宿の麦とろろ

秋 日高道を

全 天の鰯雲何処から切らう
九 月尽人も草木も再起動
二 科展を見て芸術家気取りなり
桐の秋籠から見る剣ヶ峰
「六甲風」轟く商都天高し

十三夜 梅澤佐江

躰り口までの飛石ふぢばかま
長き夜や電気ケトルの滾る音
吹抜けの寺の百畳萩の風
越後国の「思ひのほか」の菊脰
花言葉添へて文書く十三夜

櫟の実 松宮保人

雲隠れあり面白や月の宴
五湖の色みな殊にして秋暮るる
銀杏の二個の風味や茶碗蒸し
撓なる良き色づきや毬の栗
公園墓地足裏に覚ゆ櫟の実

秋 簾

丸山 マスミ

秋 蝶の葉風に遊ぶ向島
江戸小紋の薫る工房秋簾
百坊の跡の静寂や桐一葉
身に沁むや地図より消えし父母の里
予定なき途中下車して紅葉狩

鹿鳴館の色

正木 萬蝶

鹿鳴館のドレスの色の葡萄食ぶ
食卓に湯気の立つもの秋ともし
秋の灯や螺鈿妖しき妻の筥
あぶな絵と大津絵ならべ秋ともし
水鏡に百鬼の影や放生会

つくつくし

檜 鼻 ことは

代代の先祖の田んぼ終戦記念日
いさぎよきまでの青空夾竹桃
お花畑首手ぬぐひの父を待つ
冬瓜や天気予報は今日も雨
妻籠より馬籠の宿へつくつくし

現人神

池田 雅夫

霜月や現人神とあがめられ
現役の赤きポストや冬日射し
風を躲し木の葉一枚残りたり
風の尾根を一蹴散居村
茶の花と気づかぬままに白寿かな

音楽会

原田 自然

虫時雨ソプラノアルトリンリン
虫時雨背中に重き吾子となる
虫時雨手入れ不足の庭繁る
虫すだくおまけの人生の八十路踏む
並木道前後左右に虫の声

秋きさら

河野 はるみ

絵に遊びかをり仄かに秋扇
尊徳の墓に野の花カップ酒
育休のパパ御三どん新米来
ぼつぽつと花のおとなひ月今宵
虫の音に田舎言葉の二つ三つ

星月夜

石川理恵

父を看る当番の日の秋ともし
葡萄買へば葡萄たまはる日でありぬ
病床の子へ皮を剥く葡萄かな
窯変の妖しき器にごり酒
外湯へと急ぐ小径や星月夜

銀の潮

曲淵徹雄

脳天をやんはりと打つ秋の蟬
星月夜鯨が銀の潮を吹く
電線を悶えさせたる野分かな
もつたりと纏れて藪へ秋の蝶
秋の夜の月食けだし神隠し

瓢箪

原田秀子

初秋や殊更浅間うつくしく
上州の風に瓢の高笑ひ
青瓢箪ロイド眼鏡が様になり
あらまほし美事な括れ青瓢
天高しふはり「ノンちゃん雲にのる」

ふるさと

大塚茂子

幼顔残る花嫁天高し
窓越しに括れの美しき青瓢
爽籟や峡の寺より鐘の音
さんぴらの味に馴染みて鷹の爪
唐辛子軒に干されてむかしむかし

独房

近藤徹平

独房に馬追の声「朝は来」
とろろ汁芭蕉の愛でし丸子宿
閻王の門に心張り秋遍路
峡の宿萩のこぼるる露天風呂
十日の菊カラオケ競ふ配膳婦

秋深む

飛永鼓

桐一葉村に空屋の又ひとつ
天高し農に闘志のまだ少し
手の平に乗せ確かむる稲穂かな
秋深しコーヒー店に行く日課
青みかん隣家の男の子背の伸びて

タワーの灯

荒井 俱子

元の句に 戻る 推敲 秋灯 下
露草に 屈めば 風の 径ありぬ
無月なり 子に 読み聞かすかぐや姫
無月には 無月の 風情 タワーの 灯
天高し ボール 蹴る 子の 長き脛

ボンジュール

内田 恵子

枸杞の 実や 上目 使ひの 女の子
洋梨と オムレツ ふはと ボンジュール
洋梨の 歪が 個性 絵筆 とる
上で 止る ぎつたんばつこ 秋夕 焼
影法師 我と 離れて ゆく 良夜

秋刀魚

上戸 千津子

秋刀魚 焼き猫の 遠巻き 耽耽と
赤とんぼ 護衛するかに 前うしろ
見えねども 稲穂の 波に 風匂ふ
流星や 恐竜 住みし 星に 住み
櫂の 音 秋を 軋むや 淡路 島

天高し

川崎 道子

天高し 空を 目指して 棒高跳
竹杖で 道を示さる 鴟日和
掠たちて 身の 軽くなる 御神木
閉門の 梵鐘が 鳴り 雁渡る
あの山を 越ゆれば 他郷 雁渡る

松茸

西浦 千枝子

幼子の 声に 元気を 紅葉道
古き友より 届く 松茸 命日に
乾盃の グラス 高々月の 夜
シャンパンの 泡を 楽しむ 星月夜
金木犀 商ひ 上手は 祖父 ゆづり

百二歳

野口 和子

栗剥くやもう 一粒の きりもなし
葛の花 知人 見つけし お悔み 欄
奉納旗 キラキラ ネーム 地蔵 盆
怠りし 小庭の 手入れ 大蟬 螂
百二歳 敬老の 日の ブイサイ ン

秋暑し 松山清子

診察の女医のピアスや涼新た
底紅の零れて風のあるを知る
ダンボール束ねひと息秋暑し
前栽の獣めく影良夜かな
松手入れ庭師の声のこぼれきて

秋刀魚 井上玲子

庭奥に朱の一群唐辛子
風通る軒端に吊す唐辛子
秋刀魚焼く煙の中に逝きし夫
ボストンの娘は故里へ秋刀魚焼く
身に沁むや狭庭の宴しづもりて

良夜 福田千春

そぞろ歩きつなぐ手探る良夜かな
白桃や赤兎なけれど乳太り
軽やかな靴音帰る良夜かな
放たるる魚待つ鷺や放生会
絵硝子の天使輝く秋没日

片便り 熊倉千重子

涼新た姿勢正して抹茶受く
秋出水訪うて見舞の言葉無く
食べ頃の庭のいちじく採る朝
桐一葉病臥の母へ片便り
一葉落つ園庭の黙昼の黙

海の民 松島寛久

太刀魚と秋刀魚の大小の刀かな
旅立ちに溜息一つ渡り鳥
稲刈や「稲子」と言ふ娘の風便り
喧噪の列島はるか渡り鳥
黒潮に大ぶりの秋刀魚海の民

秋の果物 瀬戸雄二郎

とりどりの秋果並んで道の駅
柘榴の実少年頑と口割らず
一房の葡萄に兄弟二本の手
葡萄食ぶ種は出すなと甲斐の人
トランプが又無茶を言ふ良夜かな

季音花

風神 笹本啓子

風神の袋健在芋嵐
団長の野太き声や黍嵐
黒潮の匂ひ運びし秋鯖よ
露草や八十路は涙もろきもの
秋高し機影に確とJALマーク

最終便 横山君夫

野分立つ最終便を待つ女
野仏の顔して啜るところ汁
沖合ひを航空母艦松手入
霧晴れてダム湖の水の碧さかな
軒の端に増ゆる吊り物暮の秋

白髯 保坂翔太

鏡台の吾の白髯や秋の風
抜け殻となりし集落藪からし
心底を明かす友垣秋思断つ
金色夜叉の浜辺を漫步良夜かな
名月やはりまや橋にいごつそう

秋 渋谷きいち

古民家の売りに出てをり露華
鶏頭や赤信号を消防車
夕露や廃駅にある時刻板
錦木のくね刈る音のこちよく
新米を担ぐ親父の肩の瘤

星月夜 染谷風子

女王花や令和の御代に通ひ婚
八月の果てて白い齒黒い顔
新秋や乗つてみたきは舳斗雲
三更やすいと遠くに四畳半
星月夜ギリシアの神は多情なり

良夜 鈴木玲子

友の夫へ 献杯 低く 秋の 昼
ふいに 昼か と 見紛ふばかり 流星よ
赤蜻蛉 よかに せどんと よか おごじよ
角刈りの をのこも 寄りて 蝗捕り
盃のお多福 揺るる 良夜かな

虫の声 越田栄子

スカイツリーは 巨大な 支柱 天高し
ローソク 岩に 夕陽の 灯る 初秋かな
ゆらゆらと 艶く^{なまめ} 丸み 青ふくべ
月光に 馬追の 影鳴きは じむ
耳鳴りの 闇に 馬追来て 啼けり

秋され 菅原卓郎

入り日 負ふ 背の 梵字や 秋 遍路
牛の 眼に 釣瓶 落しの 神の 嶺
心張 棒確かと 秋じむ 木曾の 宿
澱 なき 峡に 舟 唄 菊 膾
虚貝よ する 浜辺の 涼あらた

照葉 梅澤輝翠

子の 思ひ 母の 想ひや 秋の 海
粥す する 若僧の 背に 涼 新た
尼寺の 水面 紅増す 照葉かな
かはらけを 投ぐる 古刹の 秋夕 焼
座蒲団 舞ふ 仕切り 直しの 九月 場所

肩車 石田慶子

見物客に 交じる 猫めて 放生会
肩車 父と わたしと 赤とんぼ
新涼や 男所帯の パンケーキ
野分あと 昔大工の 祖父ありし
秋扇尻 ポケットに 見え隠れ

森の教会 下川光子

教会へ ランタン 掲ぐ 今日の日
秋灯の「森の教会」人を 恋ふ
灯と として 賛美歌 びびく 夜の 涼し
幾千の コスモスに 会ふ 風に 会ふ
ここだけの 話ふむふ 猫じやらし

秋日和新曆文

素人の庭師三人秋日和一合を余す新米共白髪ふつくらと湯気立つ椀や今年米身に入むや单身赴任の四疊半秋刀魚焼く煙の先に月明かり

海池田珪子

喪心のうすれ行く日日鰯雲大津波引きたる跡や葉鶏頭秋の風一本松に戦ぎをり遠望の白きプラント秋の海鎮もりて月なき海の深さかな

螢草清水桂子

絵筆手に絵ごころ少し螢草枝豆をつまみ産地の談議聞く秋鯖や鯖街道の今むかし天空に遊ぶひととき天の川今日のひと日の命をたたみ白木槿

煌めきの若狭湾野村美子

鯛や心の籠もる機の音阿波の地の畑一面に藍の花小雨の中に母の面影こぼれ萩会津塗の美しき小鉢や菊膾秋光や水尾煌めきし若狭湾

秋やうやく寺内洋子

雁の竿こぼれさうなるひと雫ママ友のいつか婆友秋高し秋風や白髪並ぶクラス会秋深む本を友とし八十年「買うてんか」艶よき秋刀魚に呼ばれけり

命の限り宮崎チアキ

正門にゆるキヤラ置かれ敬老の日虫の合唱命の限り啼き通す心奥の闇叩き出すかに鉦叩夕厨五官うるほす菊膾秋簾揺るれば夫の帰還かと

秋に入る 西幅公子

惹かれたるこの澄んだ目の秋鯖よ
組子障子の粋な料亭秋の月
開墾地揺るる重き穂黍嵐
散歩犬腹這ふ木蔭残暑かな
恐竜や人類ほろぶこの猛暑

胡麻を刈る 森和子

胡麻を刈るそばより変はる風のだ
胡麻干すや旧りし戸板の埋まるほど
椎茸の掌ほどや直売所
茸汁ふるまふ婆の声朗ら
糶田を抜けて電車はラストラン

秋深し 山戸美子

秋深し一匹だけのドッゲラン
托鉢の僧の背中や秋深し
展示品やうやく仕上げ秋深し
施設への叔母の入居や秋更くる
叔母の事母に言へずに秋更くる

遊歩道 綿貫ひさの

鶏頭の怪しき赤や寄り難し
ペアで来てふはりと棹へ赤とんぼ
急ぐ帰路薄紅色のうろこ雲
窓の下今夜も来てるちちろ虫
きちきちと飛蝗とび出る遊歩道

秋の風 山岸久美子

波音に和する遠音や黍嵐
畑ごとに揺らしてをりぬ芋嵐
降る雨に打たれ花散る萩の花
夕暮れの路地の灯るや烏瓜
愁ひ脱ぎ無心の湯浴み星月夜

水澄蜻蛉 佐々木史女

牧場の牛の群れ追ふ赤とんぼ
新しき村の水澄み涼しかりけり
菩提寺の子供地藏に赤とんぼ
赤とんぼ夕焼雲にかくれけり
店の裏かこむ大池水澄めり

『水明誌』を繙く（水明八月号）

浦川 聡子（「オリブの会」主宰、
「晨」同人）

信濃路に四つの「平」下萌ゆる 五明 昇

信州の地理的広がりと季節の移ろいを巧みに重ね合わせた一句であり、土地に宿る生命の息吹と時間の流れを詠み込んだ作品です。「四つの『平』」は松本平、佐久平、伊那平、善光寺平でしょうか。いずれも山々に囲まれた平地であり、古くから人々の暮らしが根づいてきた場所です。地形的な特徴を詠み込むことで、句は単なる自然描写を超え、土地の記憶や人々の営みをも内包する詩的な地誌となっています。

季語は「下萌ゆ」。まだ寒さの残る早春、雪が解け始めた土の中で見えない生命が静かに動き出す微細な変化を捉えた「下萌ゆる」という季語には、季節の移ろいだけでなく、希望や再生の予感が込められています。

この句の美しさは、広大な信濃路に点在する四つの「平」が、同時に春の兆しを受けて萌え始めるという、時間と空間の交錯にあります。それぞれの「平」は地理的には離れていても、季節の力によって同じように生命の息吹を受けている。その連帯感が、土地の広がりを超えて、自然と人間の営みを結びつける力となっています。

夜更けすぎ月下美人と密会す 池田雅夫

花と人との関係性を幻想的かつ官能的に描いた作品であり、時間、空間、感情が交錯する詩的な世界を構築しています。わずか十七音の中に、深い物語性と象徴性が込められており、読む者の想像力を刺激します。

まず「夜更けすぎ」という時間設定が、この句の雰囲気を決定づけています。夜更けとは、日付が変わる頃から深夜にかけての静寂な時間帯。人々の活動が止み、街が眠りについた後の、最も静かで、最も感覚が研ぎ澄まされる時間です。この時間に咲く「月下美人」は、まさにその名の通り、夜の美しさを体現する花。一夜限りで咲き、翌朝にはしほむその儚さは、恋や情熱、秘めた想いの象徴とも言えます。「密会す」の措辞は、花との出会いを人との逢瀬に重ねること、句に官能性と物語性を与えています。月下美人は、ただ咲いているだけではなく、語りかけ、誘いかける存在として描かれているのです。作者はその花に会うために、夜更けにそっと足を運び、誰にも知られずにその美しさと向き合う。そこに自然との親密な関係、自分自身の内面との対話が感じられます。

現代俳句鑑賞

網野月を

巢立ちたる鷹空のものの空深く

西山 睦

〔俳句〕9月号・海泊まりより〕

大いなる空の偉大さを賛美するような句意であろうと解釈できる。鷹もまた「空のもの」であり、その「巢立ちたる鷹」が空の奥深さをより鮮明にしているということである。頭上に広がる空に対して「深く」の修飾語がこれまでの空の本質を新しくしている。他に「一匹の蟻柵を行く日雷」がある。

毛虫として身を振ひゐる外待雨

佐怒賀正美

〔俳句〕9月号・超猛暑ながらより〕

題名の「超猛暑ながら」から解釈するに、「毛虫」でさえ暑さを耐え忍んで、望外の雨に「身を振ひゐる」というのである。細かいところへの観察眼の鋭さが、行き届いているようだ。何時もながら俳句表現の枠組みや表現しようとするこのテーマ性の在り方を模索しているように思われる。俳句という表現のキャパシティを常に拡大し続けている作家なのである。他に「八束忌に辿る横降りよこふりの雨の坂」「魂たちと宇宙へ出でむ超猛暑」がある。

都市という屍しのしのめに緋の薔薇を

高岡 修

〔俳句〕9月号・秋の犬より〕

座五の「緋の薔薇を」の何とも気障なことであろう。「屍の」「しのめのめに」という設定もまた格好を付け過ぎているように筆者には感じられるのだ。それほど「都市」というもののへの反骨がある作者なのであろう。作者ご本人曰く、「緋の薔薇を」は揺るがせられない、ということである。他に「秋の犬来て永遠を嗅ぎまわる」がある。

炎帝に召さるごとく歩き出す

雨宮きぬよ

〔俳句〕9月号・日日花より〕

自分で自分の体の動きが制御できないような感覚がある。中七の「召さるごとく」は恰も「炎帝」の呪術に掛かった様にといいことである。何か抗えない魔力か何かが働いているようである。他に「緑蔭の許に鋭利な線描画」がある。

引力が雪解に加勢したらしく

川井城子

〔俳句界〕9月号・自選30句より〕

句意が本当に自然界のことを教科書的に表しているのかど

うかは分からない。筆者は自然科学者ではないのです。ただ、「雪解」には「引力」が関係しているように思ふのである。「加勢した」かどうかは不明だが、そこが表現の領域というものであろう。作者も「：らしく」と少々お茶を濁している。この躲し方もまた俳句の表現の領域である。他に「いつからか小で間にあふ宿浴衣」がある。

この道の奥は鎮もる秋の海

原田厚子

〔俳句界〕9月号・秋の風より

灯台を配置する岬の道を想像した。常に強い潮風にあおられてゐる特有の植生が想像される。その海が今日ばかりは「鎮もる秋の海」になつてゐるのである。記憶の中のアルバムを捲つてゐるような景である。他に「碑の文字は武蔵直筆秋の風」がある。

お隣の似た山国や龍太の忌

矢島渚男

〔俳壇〕9月号・これからより

作者は信州の方とうかがつてゐる。信濃と甲斐の「似た」ということである。万葉の時代から、戦国の時代を経て今現在でも「お隣の似た山国」なのである。他に「不自然度増しつつ歳時記亡びゆく」がある。

地の声を天へ放てり朝の蟬

藤田直子

〔俳壇〕9月号・乞巧奠より

「天へ放てり」に生命の活力を感じる。幼虫として地中に長年生息した蟬が成虫になつて、放つ初声を上五に「地の

声」と表出した。蟬の本質を遺憾なく表現しているように思ふ。蟬の声を「天へ」向けてゐると思ふ時、人もまた同じ生命体であると感じずにはゐられない。他に「乞巧奠糸のやうなる雨よぎり」がある。

広がつて来る男らの手に団扇

後藤 章

〔俳壇〕9月号・七句より

埼玉県は熊谷の「うちわ祭」の景を想像した。七月に開催される「関東一の祇園、武州熊谷」は八坂神社の祭礼である。嘗ての振る舞い赤飯と共に配り団扇に因んだ名称である。上五中七の「広がつて来る男ら」が将に団扇の形状と符合して構成の行き届いた句になつてゐる。他に「大谷を見てパン食べてこどもの日」がある。

諍ひの無き世を生きて残る虫 壁の染み時に預けて秋あはれ

青木 鶴城

〔俳句四季〕9月号・秋あはれより

前句は季語の本意の所為ではなく、少々だがもの悲しさを感じずにはゐられない。反戦句として読むことも出来るのだが、個人的な感傷の句として解釈することも出来る。座五の季語「残る虫」は生存競争を忌避して未だに泣き続けているという解釈である。次句は秀句である。中七の「時に預けて」の措辞が作者の人生観を体現しているし、俳句でなければ表現し得ない境地を、押しつけがましいことなく、描出している。見慣れた「壁の染み」には人生の思いが凝縮されてゐるのである。他に「必ず約束なんて青蜜柑」「告白を呪文のやうに祭の夜」がある。

水明と私



永野史代

記念すべき九十五周年の時にかな女賞を頂いた。身に余る光栄、喜びである。私のこれまでの経緯は、前も書いたが、書き足したい水明の方々がいる。鶴川句会は、元の二木亭、瀬戸雄二郎宅だった。

松本孝太郎師はよく吟行会を行った。山本紫黄先生がよく一緒にいた。小田原城での師の一句、「遅日の象うしろ歩きをしてごらん」その後の句会でも師の句には目を見張った。鶴川吟行では袋まわし「夜濯の女のは小さく揉む」史代、歌と踊りを夜遅くまで楽しんだ。紫黄先生は東海林太郎の歌を直立不動で物まね。締めは孝太郎師の相撲甚句、ドスコイドスコイ。神奈川県現俳では青年部。当日の一句会で、「海へ飛びたき団栗の落ちつぷり」が特選一位で、賞状と楯を頂き、神奈川県新聞にも載って驚いた。西東三鬼賞は秀逸で、紫黄先生が津山の知人に葉書を書いて下さる。三橋敏雄、鈴木六林男（花曜主宰）と同じテーブル。お二人のトークは圧巻！大高ご夫妻の計らいで敏雄句「絶滅の彼の狼を連れ歩く」の短冊を頂いた。会場では「さふらの花マルセーユ遙かなり」の句が軸になって掛けてあり驚いた。紫黄師はよく葉書をく

ださり色々な句の感想も頂いた。

紗一主宰（三代目）に能登、珠洲方面へ誘われた。知らない先輩方の中で、明世師は星野和葉氏と相部屋にしてください。紗一師は、「若い新しい人の句作ってよ」と。丁度娘の小学校のPTAの母親たちが我家に集まって呟きの俳句のまねごとをしていた。これがミモザ句会の始まりである。発行所では、若葉グループが出来、光二主宰（四代目）が資料と水明創刊號を配って進行。グループ指導者の心得も配られた。ある日の鶴川句会では、町野広子、網野月を、三浦文子、吉田蒼生子氏もいらした。文子氏との出会いは生涯影響を受け今も大切な友である。広子、月をも然り。象映会（長谷川象映氏）の指導をされていた吉田静二氏が体調を崩され、毎月句会の評を頂きに自宅まで伺った。その後の奥様の手料理の美味しかった事。谷川の林間学校（相沢静思山荘と金盛館）へ誘ってくださった落合水尾氏（浮野主宰）。山本嵯迷先生は、「あなたの句は面白い」と云いながら「雪溪を仰ぎ捨身の石となる」を選んで下さった。山本鬼之介現主宰もいらした。栢尾さく子、国領恭子、も一緒に。花火大会の

煙が沁みた。野馬追では、小高の杉本文彦、松坂まさお氏達にお会いした。雲雀が丘の神旗争奪戦、帰り馬、夜は文彦氏宅裏の土手で花火、向こう岸まで見え、珊瑚の人たちと静かに見入っていた。文彦氏の北寄貝のおにぎり、茄子の丸漬、皆おかわりをした。秋子師の急逝。追悼句会が浦和で開かれた。「寒い椿を秋子椿と思ひけり」史代が大畑南海魚先生の特選に。

ミモザ吟行で神楽坂へ。河村真理さんはこの有名な甘納豆屋の出。皆で甘納豆を買いに入ると、女の方が「私は川口からお嫁に来て、真理さんは川口へ」不思議な縁。珊瑚の明世先生と幹事は節代さん、長い付き合い。今もお世話に！）寿子氏宅の松本へ。句会の方々が美味しい食事を作って待っていた。松本城等を見て茅野の民宿へ。

若狭へは何度も伺った。大会前、城子氏は「釈尼秋華」のお墓へ案内してくださり、広子さんと共に拝んだ。黙禱。月を、広子、史代の三人でも若狭へ。白露氏の案内で、明通寺、若洲一滴文庫まで。初花氏、自然氏（法螺貝の方）大勢の若狭の方々にお世話になった。若狭の人は、なだらかな山のようになやさしかった。三人はひっそりした三丁町へ。「小浜三丁町灯りの滲む小夜時雨」史代。駅のホームでは、宇野由希子氏たちが見送って下さった。

私の句集版記念は、上野精養軒。紗一主宰夫妻、月の会（田上多佳子東大科学科専長）、久枝、菊池ひろこ、あたたかな会であった。

紫黄師の供養塔がある本郷の先まで出かけた。この供養塔

に戸沢可伊さんも眠っている。三澤容一（元水明）は幹事で活躍。田中悦子（元あざみ）とは行動を共にし、いつも助けられた。現俳では「わたくしをひらいてみればきつとゆふがほ」が寺井谷子先生の目に止まり、源氏物語を思わせる句と評を頂き感激。青年部で一緒に緒した須藤徹氏は、「ぶるうまりん」を作り、現俳で活躍されたが、逝去。池田澄子氏とは、halkobay 吟行で清澄庭園へ。私の「藤芽吹くのたうつやうな幹が母」が特選に！

横浜水明会のご指導をされていた中山玲子氏はお洒落。かな女先生からは詩人と言われていた。句会の後、度々横浜で夕食。草加の倭子氏もいらした。玲子氏が入院され、君津の病院へ。なんとその日に逝去され、急ぎ先生宅へ。その後祥氏も逝去。お嬢様は、二人を海へ散骨された、と私に手紙があった。激しくも儚いお二人の人生であった。

象映氏の築地の事務所で古典講座が開かれた。有沢蜜講義水明の「音なの俳句」講師堀田季何氏もいらした。蛭氏の逝去を季何氏から聞いた。季何氏の朱馬句会に誘われ横浜の海まで。「棧橋晩夏へブンリーブルーの空を恋ふ」が特選に！

思えば様々な縁、出会いと別れ、感謝の日々である。我が家の和室に掛けてある軸は「織女星とは今瞳の中にある光り」秋子師作。私の結婚祝に贈って下さった大切な軸。「焚火してゼウスに届く煙かな」史代

只々水明の沢山の人に感謝。故山中順子師、先輩、句友。そして静かに私を見守ってくれた夫と娘にありがとう。

（文中敬称略）

自選五十句

永野史代

ひと死んで冬陽大きく滑りだす
雪溪を仰ぎ捨身の石となる
穴掘つてもほつても六月の犬退屈
喇叭音いびつに鳴りぬ春嵐
さふらの花マルセイユ遥かなり
人間の骨なにいろに稲妻す
桜びつしり塞がれさうな父の息
父よ冬の嵐ですあなたの忌日です
酒倉に麴の匂ふ雁渡し
耳聴く夫の靴音聞く霜夜
薔薇の芽に棘人間に毒舌

一舟を春燈となし隅田川
臍を蹠はな少女聖五月
卓袱台を片隅に置き昭和の日
はんざきや我にもありぬ深眠り
ゆふぐれはホルンを鳴らすかたつむり
戸袋に朝の蜘蛛ゐる吉兆か
北窓開く父の医学書黒光り
沈丁花咲かせて本日休診日
ゆらゆらと早寢島まで浮寝鳥
花一匁古里の葱坊主
月の軸掛けて月夜を豊かにす
浅草に古りし髪結ひ返り花
返り花たれもとがめたりはしない

わたくしの真うしろにゐる雪女郎
朧なるわが身に真水通さねば
生ある限り前傾姿勢羽抜鶏
日盛りといふ暗闇におそはるゝ
卓袱台の胡瓜もみ母がゐて兄がゐて
丁寧 に 塩 壺 洗 ふ 敗 戦 日
大きな桃を握り潰してしまひたく
白鳥の一羽が白を越えてゐる
風船とばそ韃靼海峡までとばそ
遠雷や義眼を洗ふ男の背
わたくしをひらいてみればきつとゆふがほ
海へ飛びたき団栗の落ちつぷり
小浜三丁目灯りの滲む小夜時雨

蒸 鯨 城 子 亡 き あ と 酔 ひ 易 し
限 り な く 素 数 の わ た し 二 月 来 る
恋 猫 の 出 自 は 大 き 門 構
種 を 蒔 く 生 命 線 の 太 き 夫
夜 濯 ぎ の 女 の も の は 小 さ く 揉 む
忌 の 父 が 途 中 下 車 す る 冬 銀 河
抜 き に 出 て 闇 に 葱 の 香 移 し を り
燕 帰 る 空 の 何 処 に 道 し る べ
鰻 焼 く 職 人 芸 の 人 無 口
焚 火 し て ゼ ウ ス に 届 く 煙 か な
漱 石 の 脳 は 重 か り 冬 に 入 る
身 の ど こ か 刃 こ ぼ れ の あ り 天 の 川
寒 い 椿 を 秋 子 椿 と 思 ひ け り

史代頌

「鋭角の表象と球体的なイメージの創出」

網野月を

膨大な一連の作品は死生観を投影する世界観と、棘がないと言うよりも角のない表現のアンビヴァレントな側面を両有しているようだ。そして良い意味での少女的な死生観は透明度の高さとナイーブな性向を含有している。一方で作者特有のユーモア精神の横溢した句には丸味と言うよりは、球体的なイメージを見て取ることが出来る。

作者のお人柄がそのまま句の表皮に滲み出て、且つ作句の起点になる部分にも大きく関与しているようである。鋭角の表象と球体的なイメージの創出というアンビヴァレントなベクトルが一つの人格に統合される時の葛藤のようなものを筆者は感じるのだ。つまりその葛藤は、表皮と心底を体現して諸々の句に結晶するわけだが、どの句を鑑賞しても紛れもなく作者の御句であり、矛盾がない。完全の合一を果たして成し得ているのだ。

句のテーマとの関係性そのものが人物の本質に適っているということであろうと想像する。それだけに句のテーマが俳

句として表現される時に、無理なく言語化されるということもある。

言語化、つまりこの場合には詩韻であるが、その作品の中には、無論、虚構もありファンタジーもあるのだが、作者の肉体をそうした句のテーマが通り過ぎる時に言わば昇華されて俳句という実体を有した詩韻になるように思われる。一種のカタルシス（浄化）が起こるのである。であるから作者の場合は、決して「再現」にならずに「形象」としての俳句に成るのである。写生句としても、例えば自然の「再現」ではなく、自然をとらえた作者の心の在り方を象徴する「形象」になるのである。

向日葵の闘志我にも生まれけり
穴掘つてもほつても六月の犬退屈
秘かなる 燃焼稲妻の夜の恋
雪溪を仰ぎ捨身の石となる

以上の四句は作者の初期の作品に属するであろう。「闘志」の句は星野紗一が高く評価した句である。作者の句集『喇叭音』の初句である。「犬退屈」の句は作者特有のユーモアを感じざるを得ない。

ひと死んで冬陽大きく滑りだす
馬蹄音夜の噴水へ消えゆけり
喇叭音いびつに鳴りぬ春嵐
桜びつしり塞がれさうな父の息
父の忌のうすく入りたる冬日かな
雪の髪払はず歩きたきときも
人間の骨なにいろに稲妻す

続く七句は、前衛とは異なる何かを感じる。人間ならだれしも有している魔性を振り捨てる為の作句、言わば作句することと精神のカタルシスを目指している作句＝行為であるように思われる。この七句のような句のテーマを作品に昇華する際には、作者自身が自らを癒やしているような思いをされているのではあるまいか。

父よ冬の嵐ですあなたの忌日です
耳聴く夫の靴音聞く霜夜
卓袱台の胡瓜もみ母がゐて兄がゐて
忌の父が途中下車する冬銀河
蒸鯉城子亡きあと酔ひ易し
種を蒔く生命線の太き夫
寒い椿を秋子椿と思ひけり
ゆふぐれはホルンを鳴らすかたつむり
ゆらゆらと早寝島まで浮寝島

作者には父親を詠んだ句の他に身近な人物を詠んだ句が散見される。作者にとっては心的近景の句であろう。そして自分自身をも「かたつむり」や「浮寝島」に見立ててしまうのである。自嘲の句であろうか、それとも実は深刻な事柄が隠されているのであろうか。作者にうかがってみた。

返り花たれもとがめたりはしない
わたくしの真うしろにある雪女郎

「かたつむり」や「浮寝島」に比すればすぐにわかることであるが、実に作者の創造の世界はレンジが広い。身近な人たちからファンタジーまで、心象の映像からシニールな虚構の世界まで描出している。それが俳句の本質かも知れないが、

作者の手にかかるといかにも軽々とそして自由奔放に無限に広がる世界の創造を成し遂げているように思われる。

大きな桃を握り潰してしまひたく

白鳥の一羽が白を越えてゐる

わたくしをひらいてみればきつとゆふがほ

以上の三句は作者の代表句であろうと勝手に筆者は考えている。句のテーマはさておいて、表現における自由度の高さと貴尊な精神は稀なものである。

そしてまた、作者の心の裏側が顔を出すのである。ここらの裏の顔は、嘗てはエクソシストを寄せ付けない魔性に變化することもあったのだが、ここに至っては、精神、「桃を握り潰す」くらいのものである。前掲の「ひと死んで冬陽大きく滑りだす」「人間の骨なにいろに稲妻す」に比すれば、魔性の何と球体的なイメージに変質したものである。へ魔性を振り捨てる為の作句を重ねて来たからこそ、球体を創出するに至ったのであろう。だが、その球体の硬性は至極のものである。美しく完全な球であるが、誰にも壊すことの出来ない球である。

限りなく素数のわたし二月来る

夜濯ぎの女のものは小さく揉む

以上の二句もまた代表句であろう。相反する二句である。だがこの二句には作者が至った境地のようなものを筆者は感じる。等身大の表現の中に無限の世界を創造している。そこには長谷川かな女でもない、長谷川秋子でもない、永野史代が確かにいる。

生ある限り

大村節代

かな女賞おめでとうございます。水明創刊九十五周年という記念すべき年に、ご受賞まことに喜ばしい限りです。

桜びつしり塞がれさうな父の息
父よ冬の嵐ですあなたの忌日です
北窓開く父の医学書黒光り
忌の父が途中下車する冬銀河
沈丁花咲かせて本日休診日

かな女賞の作家特集に史代さんの五十句と文章を頂いて、史代さんの句を何度か読み返すと、お父様の句が、五十句中五句登場します。その何れの句からも、父を慕う娘の心情が

伝わり感動しました。

しかし史代さんが、少し体調を崩されてからは、ご主人様が全面的に支えて下さっていらつしやるようです。今回のかな女賞受賞の全国大会へも、ご主人が付き添って、会場のパインズホテルにも、共々お泊まり下さったと伺いました。

耳聴く夫の靴音聞く霜夜
種を蒔く生命線の太き夫

生き生きと力強く頼りがいのあるご主人様もしつかりと、登場されています。ご主人様のお帰りの靴音をいまかいまかと待つ様が伝わります。

人物を深く見詰める史代さんは、ご自分の事も次のように表現されています。

わたくしの真うしろにいる雪女郎
はんざきや我にもありぬ深眠むり
わたくしをひらいてみればきつとゆふがほ
限りなく素数のわたし二月来る

ご自分を見事に表現される史代さんが、五十代の頃だった

でしょうか。「ねえ見て、昔の写真よ。」とそっと見せて下さったのは、何と史代さんの若き日の水着の写真です。楚楚とした史代さんの外見と違って、出る所は出て締まる所は締まって見事なプロポーションです。

この特集にあたって「ねえ、昔見せて頂いたあの水着の写真を載せない？」言いましたら、「何言ってるの載せるわけないでしょ。」と言われてしまいました。残念！

小浜三丁目灯りの滲む小夜時雨
蒸鯨城子亡きあと酔ひ易し

水明の心の故郷若狭へは、水明や珊瑚や他の集まりで、皆、何度か伺わせて頂いていますが、史代さんも珊瑚で行った吟行が最初に若狭に伺った旅行だったと思います。

私達が何う前に、明世先生が「木曜会」のお姉様達と若狭に伺うと宇野常人さんが明世先生に、「婆あばっかりじゃないか。もっと若い会員を連れて来い！」と言ったとか。

明世先生が「わかった！次は若いのを連れてくるから」と応じて私達の訪問となったのです。

明世先生、星野紗一先生、吉田静二さんに伴われ、私達がバスから下りると島津城子先生はじめ霜中孫左、宇野常人、

福谷達二、松宮柚二の当時の若狭五人衆と島津初花さんが迎えて下さいました。

私達に会うと常人さんは明世先生に「何だ、今度も婆あばかりだなあ」と言ったとか。当時の珊瑚は四十代の史代さんはじめ四十代から五十代でした。

その後も城子先生には、皆の行く観光地だけでなく、あちこち届を出して、原子力発電所を見学させて下さったりと本当に良くして頂きました。

生ある限り前傾姿勢羽抜鳥

何と言う力強い句でしょうか。この句によって、史代さんの病を得ても、しっかり前を見て生きている秘密が分かったような気がします。

何があっても前傾姿勢ですよ、史代さん。

漱石の脳は重かり冬に入る

史代さんは博識で勉強家で、意思のしっかりした強い人です。日々俳句の事を考えていらつしやる。

かな女賞おめでとうございます。
ますますのご健吟を！

永野史代 の一句



石井喜恵

大きな桃を握り潰してしまひたく

史代さんの句はどれも卓越した暗喩の句が多く、鑑賞するにはつくづく力不足を思い知らされます。この句を読んだ時、池田澄子さんの「傷みつつ桃のかたちをしていたり」を思い出しました。恰も対をなす一句のようで、桃は触れただけでそこから傷んでくる繊細な果物です。それでも美しい形を失うまいとする葛藤を詠み、史代さんはそれを知りつつも握り潰してしまいたいと詠む。その鬱屈した心情を余す所なく詠み切って深い思いが伝わってくるのです。

此の度はかな女賞おめでとうございます。もともとは明るく茶目っ気のある史代さん。二十代の頃は浦和にお住まいで二代目主宰の秋子師の薫陶を受けられたとか、私達の大先輩なのです。今は闘病中のこととて。句会でお目に掛かることが出来ないのが残念です。又一緒にできることが楽しみにしております。

石山かつ子

穴掘つてもほつても六月の犬退屈

最近の犬は家の中に人間と同じ空間に飼われていて、散歩の時だけ服を着せられ首輪も綱も美しく飾ったもので飼主と同行します。もっぱら家族の一員となっています。

けれどもこの犬は穴の掘れる土の上に繋がれています。中型犬か大型の犬でしょう。人間より体温の高い犬は暑さがとて苦手です。いつもわっさわっさと穴を掘り始めます。体が埋まる位掘るとその中に入り、自身の体温を土の中の温度で冷やすのです。

犬は、穴を掘ってその中で暑さを凌ぎ冬は寒さをしのいでいるのです。一年中で昼の長い六月さぞかし一日を退屈していることでしょう。眠っていても耳だけはいつも動いていて人間に聞こえない音を聞いているのかも知れないのです。

内田恵子

限りなく素数のわたし二月来る

五十句の中からこの一句が目飛び込んできた。素数とわたしの繋がりはなんだろうか。ユニークな斬新な発想に驚く。1と自分自身以外に約数を持たない1以外の自然数を素数という。素数は有限でなく限りなく無限に存在する。自分の中の素数は誰にも犯されることのない強い芯で唯一無二だ。厳しい冬が訪れても二月が来れば春はすぐそこ。新しく再生をしていく。

金子みすゞの詩「わたしと小鳥とすずと」の一節に「みんなちがって、みんないい。」とある。明世先生の珊瑚の会は四十年近く前に発足し、史代さんは二十年以上のキャリアを積んだ俳人。私は初心者だった。だが初心者の俳句もだれの俳句にも平等に接してくれる。史代さんは確固たる自分を持っている。常に新しい自分を探し挑戦し続け作句を続けていらつしやるようである。

島津初花

さふらの花マルセーユ遥かなり

史代さんと初めてお会いしたのは、何年も前の水明全国大会の時と、若狭へ来て下さった時もありました。今年度にかな女賞を受賞されて、どうしても「おめでとう」はお会いして言わねばと。念願叶って熱い握手が出て感激でした。

素敵な句ばかりの中から掲句さふらは、花卉の紫色に魅せられます。雌しべの柱頭を採種して乾燥したものは香辛料として貴重な品でもあります。

史代さんの若かりし時、フランスでの生活は、今では遠い思い出の話ではなく、生涯の宝物として、時々扉を開けられる事でしよう。

マルセーユ遥かなりと結ばれたことばから年令を重ねられた今でこそ意味深く、史代さんの大切な一句だと思ひ沢山の佳句の中から選ばせて頂きました。おめでとうございます。

鈴木玲子

さふらの花マルセーユ遥かなり

庭に咲く淡い紫色の清らかなサフランの花。その花を見つめながら遥か遠くのマルセーユへと想いを馳せている。ご結婚されてフランスに滞在の折、訪れたマルセーユ。フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」ゆかりの地で、地中海を望む美しい港町である。地中海の温暖で爽やかな風を感じる。柔らかな「さふらは」には包みこんでくれるような優しさがあり、また韻を踏んだ軽快なリズムが心地よい。シャンソンでも歌いたくなるような……

史代さんに鶴川山百合句会へお誘いをいただいたのが二十数年前。それからミモザの会とご一緒しています。いつも自然体で、句会ではふいに懐かしい歌を口遊まれることもあり、少女のような一面をお持ちです。優しさの中にも情熱を秘めた、聡明で温和な史代さんは頼りになる素敵な大先輩です。

「かな女賞」おめでとうございます。

瀬戸雄二郎

鰻裂く職人芸の人無口

かつて浦和は鰻が名物であつた。荒川・利根川には生まれ見沼用水等水路が多く鰻が沢山取れたのと中仙道を京へ上る人達の昼食に丁度良い所だったからであらう。

浦和宿があつた辺りには今でも中村屋、山崎屋、等名だたる老舗が名を連ねている。

そんな名店でなくても仲銀座当りには親父一人で裂く、焼くをやっている小店があり、皆旨かつた。そんな頑固な職人の無口に目を付けた史代さん、お見事としか言う他無い。

福田千春

夜濯ぎの女のものは小さく揉む

一日の疲れを癒す入浴。まずは今日一日お世話になった下着を洗う。指先でやさしく揉んで汚れを落とす。綺麗に洗いあげるにはこの手間が必要だ。洗濯機まかせではダメ。当り前の日々の行動に句材を見出し、奥に潜む艶やかな想像を駆り立てるもの。それは、女のものの、小さく揉む、の二つの表現からくるものであらう。

秋子師を慕つてやまない史代さん。しとやかな印象の史代さんに、時折情熱に似た強さを感じる。その隠れた情熱がこの句には潜んでいるように思う。

手間を惜しまない史代さんの一例をあげれば、おせち料理の手作りに始まり、お彼岸のおはぎは小豆から炊き、お庭いっぱいのおはぎは伽羅路にと、何もかも手を抜かず、日々の生活を豊かに過ごされている史代さんだからその一句だと思う。

星野和葉

喇叭音いびつに鳴りぬ春嵐

我が家の近くに五〇〇世帯程のマンション群がある。五〇年程前には小流れがあり小魚やザリガニがいて子供達の遊び場であつた。その後、住宅展示場になったりしたが草原であつた頃、青年の吹くトランペットが鳴り響く様になった。いつも夕暮時で仲々良いもので時には聞きほれた。喇叭は辞書によると金管楽器の総称とあるから、掲句の喇叭音も多分トランペットではないかと思う。その強く鋭く明快に聞こえる音がその日は春の嵐により、ふらふら時にはふらりと飛ばされそうに聞こえる。その音の様子を「いびつに鳴りぬ」言い切っている表現がすばらしい。吹いている本人も強い風に負けまいと踏ん張って吹いている様子が目に浮かぶ様だ。

余談であるが「喇叭手」はいいが「喇叭吹き」は「ほらふき」に通じてしまう事があるので用心を。他に喇叭飲み、喇叭ズボン、綺麗などところで喇叭水仙など面白い。

正木萬蝶

喇叭音いびつに鳴りぬ春風

時に乾燥して埃っぽくまたある時は湿り気を帯びて生暖かい風を運んでくる春の風は青春の不安定な情緒を思わせる。作者の句集のタイトル「喇叭音」。

喇叭と言っても金管楽器、豆腐屋の喇叭、進軍喇叭諸々。春風との取り合わせには何れもを明暗を感じさせる。プラスバンドの練習風景には若さ、豆腐屋には思わず買いたくなるようなユーモアを、進軍喇叭にはやり切れない無常が音をいびつにさせたのか。年代や性別を超えた喇叭音に故星野紗一主宰は作者の個性を見出した。その後も水明を支える存在として様々な句会での活躍、特に横浜にとっては欠くべからざる存在だ。鬼之介主宰は横浜まで会いに来てくださった。近年はお体の不調もあるが句会ではお茶目な史代節はまだまだ健在である。かな女賞おめでとうございます！そして史代ばんざい！

町野広子

卓袱台の胡瓜もみ母がゐて兄がゐて

史代ワールドの拡がる五十句。昭和生まれの筆者にとっては、どの御句も心に沁みる。

選んだ一句は、自身に一層近い感情が溢れ出て来た。脚畳み式の丸い卓袱台。家族それぞれ定位位置があり、大皿大鉢に盛られた煮物晩酌の父にだけ特別の一皿がある。その父が箸を着けるのを待つて食べ始める。字余りの句ではあるが、一気に届く。「胡瓜もみ」が何とも素朴で、より郷愁を誘い母手造りの卓が見えて来る。家族が欠ける事など想像だにしない幸せな時間。小さな電球の下に満ちる笑い声。誰にもあった懐かしい想い出。

史代さんとは、鶴川山百合句会で出会い、かれこれ四十年近くなる。若かった二人は珊瑚の会や色んな行事に、せつせと浦和通いをしたものである。気配り満点で温かな彼女にずっと魅せられている私である。

今一度、おめでとうございます。

茂木和子

北窓開く父の医学書黒光り

作者より父上の事を聞いた記憶が殆どありませんでしたが全五十句の中に父恋ひの句が約一割もありました。その中より掲句の句に惹かれました。医学書を開いている父上の後姿から作者が父への想ひの回想から現実に取り戻された「黒光り」に同感致しました。

男の後姿は何時の時代でも心魅かれるものです。後姿で泣く、後姿で語る そんな男性今はどうなのでしょう、とても素敵だと思いますが時代遅れなのでしょうか？

山本 鬼之介 選

水 明 競 詠

兼 題



「夜 長」

「夜永」「長き夜」「長夜」の傍題に限る

「唐辛子」

「たうがらし」「鷹の爪」「ピーマン」「南蛮」の傍題に限る

「京」

（詠み込み）※秋の季語で詠む

さいたま 松井由紀子

摘みたき形に咎あり唐辛子
唐辛子孤食の舌を刺しにくる
東京はさみしと言ふ子鰯雲
雨だれの二拍子ゆるく夜の長く
長き夜やエッセイめいてゆく日記

伊 奈 菅原卓郎

月琴に燃ゆる京劇秋立てり
萼いまだ青きを捨てず唐辛子
風籟に赤をきはめり唐辛子
声太き犬の影絵の夜長かな
夫寝かせ児もまた寝かせ母夜長

東 京 石川理恵

並縫ひの針目ととのひたる夜長
紙の本に没入したる夜長かな
厨の隅に魔除けのごとき唐辛子
満月に導かれたる帰京かな
東京の端つこに住み虫時雨

さいたま 石井喜恵

手詰りとなりし盤上夜長し
遠ざかる足音を聞く長き夜
長き夜や沖に崩るる波の音
手にちぎる冷たき焰たうがらし
京菓子に祝の色美し初紅葉

京洛に秋暑を凌ぐ茶漬飯

さいたま 五明 昇

若き日を語り夜長の二人酒

小兵にも闕魂ぴりりたうがらし

かの国の「恨」の色とも鷹の爪

長き夜やソルティドッグをもう一杯

長き夜やオウムとつまらないテレビ

網野月を

水槽に金魚のゐない夜長かな

目を閉ぢて眠れぬことも夜長酒

おんぼろの南京玉すだれ秋夜

ピーマンの艶や斬り込む隙のなき

長き夜や地球一周して余る

唐辛子は辛し摺子木は辛し

野路の秋京街道は十四里

唐辛子罪深ければ涙雨

長き夜の天地無用の砂時計

日高道を

長き夜や子に読み聞かす偉人傳

唐辛子二束三束陽のブーケ

関つくる鶏の連鎖や唐辛子

唐辛子育ててをりぬ魔女の爪

京言葉で茶漬所望す秋時雨

茂木和子

みちのくや座敷わらしに遇ふ夜長

さいたま 保坂翔太

峡宿や魑魅の声聴く長き夜

落飾を決めしむすめや唐辛子

立待や京友禪の舞妓来る

東京湾名月めざし飛ぶジェット

北国街道夕日の色の唐辛子

唐辛子の花束飾る二つ三つ

面とれば恋す手弱女京言葉

夜長しワイングラスに夕日注ぐ

さりげなく来し方語る夜長かな

雨降れば雨に色増す唐辛子

言へさうで言へぬ一言長き夜

音読の童見守る夜長かな

過疎の村軒いつぱいの鷹の爪

時代祭の牛車の姫の京化粧

石山かつ子

秋扇持つ仕草佳き京男

鷹の爪ブーケのやうに売られけり

ピーマンや可愛げのある捻くれ者

「牡丹灯笼」朗読で聴く夜長かな

数式の解は二つや長き夜

小林京子

横須賀 大場順子

王昭君の悲話を一気に読む夜長
長き夜を刻む昭和の古時計
積ん読を繙き耽ける夜長かな
艶艶と潤びてをりぬ唐辛子
紫式部匂ふむらさき京の色

ためしてみると夜長王子の力石
長き夜のデッキ・ジャグジー独り占む
鉄を切る火花に呼応唐辛子
モルヒネを背負ひ訪問医の夜長
鳩尾に貼らるモルヒネ長き夜

和歌山 大橋勉代

上尾 横山君夫

酒蔵に麴の育つ夜長かな
家系図を囲めば長き夜となりぬ
白壁の蔵の軒端や唐辛子
干し上がりくの字ばかりの唐辛子
田のことは案山子に託し上京す

さいたま 星野和葉

さいたま 境 延昭

唐辛子鄙のことばに武家訛
長き夜やモディリアーニの長き頸
新涼や旅寝の京のおばんざい
唐辛子老婆が守るほまち畑
長き夜の酔ひ醒めに食ふ梅茶漬

秋立つや風の詠みゆく京の秘史
頭脳てふ無限の宇宙長き夜
長き夜やひらりと孤独しのび寄る
秩父路の軒端賑はせたうがらし
たうがらし館に魔女の爪のあと

霜多光代

丸山マシミ

長き夜を琴弾き通す埴輪の手
答出ぬままの別れや長き夜
鷹の爪軒端に揺るる鯖街道
白壁に色を落として唐辛子
京町屋の魔除けの鍾馗初紅葉

横浜 永野史代

ドドレミファソラシを連ねたりたうがらし
「山内かぶら」赤唐辛子極立てり
掛軸を掛け終へ和室の夜長かな
京都市左京区彼の人住める秋日和
京橋に老舗のうなぎ屋秋の暮

さいたま 菅原真理

一途なる赤きとんがり唐辛子
音ひそめ娘帰宅の夜長かな
長き夜や京番菜のはしご酒
秋簾ゆらす風あり京町家
辛味ぴりりと少し幸せ唐辛子

透かし読む女流句ゆかし夜長かな

前田 夏野

鉤針の掬ふ白糸長き夜
厨に朱唐辛子房吊れば揺る
似て非なる歌舞伎京劇秋の宵
はんなりと京美人説く長芋レシビ

岡田 宣子

長き夜や平家を語る琵琶奏者
離陸して異国の機内長き夜
包丁を研ぐ板前の夜長かな
京菓子の菊が彩る名残の茶
境内の風受け庫裡の唐辛子

若 狭 鳥羽和風

長き夜のワイングラスに赤と白
唐辛子赤ヘル軍団大鼓騷
其其に夜長を使ふ趣味があり
長き夜を眠る事無き招き猫
夕の鐘京間に掛かる秋簾

さいたま 青木鶴城

初紅葉京染め映ゆる嵐山
円卓に上座のなくて唐辛子
終電を気にする女将夜長かな
長き夜や新内三昧に聴き惚れて
唐辛子父の遺影と家庭訓

若 狭 鳥津初花

赤飯と笑顔を添へて夜永の膳
夕虹や鹿の子模様の京土産
秋風や「美味しいおす」と京訛り
これ以上色付け無用たうがらし
新しくカフェのちらし長夜かな

檜鼻ことは

長老の長き蘊蓄唐辛子
長き夜や居間の灯りはそのままに
病室を刻む秒針長き夜
長き夜や杞憂であつて欲しきこと
紅葉の賀ひとつ覚えし京言葉

さいたま 新 暦文

清張と樹海さ迷ふ夜長かな
唐辛子畑に余燼の如く燃ゆ
京の路地虫の音洩れて宵しづか
聴き澄ます雨音続く夜長かな
激情を心に秘めて唐辛子

青春の血よりも赤く唐辛子

さいたま 染谷風子

行田 近藤徹平

相輪にかかる夕月西の京

長き夜や辞書を片手に「宇治十帖」

筆の尻くはへ墨する夜長かな

長き夜や夢を相手に手酌酒

一束百円無人売店唐辛子

神戸 森本早苗

和歌山 十倉和子

たうがらし刺はんなりと京言葉

蟋蟀や一棟借りの京町屋

新酒酌むマイルドタイプの「京舞妓」

断捨離や癖字に偲ぶ長き夜

戦艦大和熱く語りて長き夜
赤ん坊なぜむづかるの夜の長き
長き夜をリハビリのチェロ繰り返す
月を待つ平城京の内裏跡
時代祭においでやつしやと京男

二次会を終へチャルメラや長き夜

若狭 松宮保人

久喜 梅澤佐江

今もある納屋の梯子に唐辛子

妻の味今日は取分け鷹の爪

八十年や亡父へ夜長の誓ひ文

炊煙や京への街道秋深む

朝市に花東のごと鷹の爪
挑発の赤きマニキュア唐辛子
京菓子に黒文字添ふる秋茶会
長き夜の雨にかそけき空耳よ
繰返す「ラ・カンパネラ」の沁む夜長

長き夜や鼓動曳きずる心電図

川口 森川義子

東京 菊池ひろこ

格子戸の軒ひつそりと夜長の灯

朝夕の風に色増す唐辛子

涙腺のふくらみてきし唐辛子

京ことばはんなり夜の蘭香る

長き夜の底に淀みて紅茶滓
眼を病めば夜長の灯火童話めく
ピーマンに陶器の艶や雨もよひ
白露かな笥を音と聴く京間
満月も修復されし平城京

長き夜や遺言状の試し書き

さいたま 皆川 更穂

レコードへ箸の指揮する夜長かな

米櫃の底や二本の唐辛子

京焼の茶碗の婀娜や風炉名残

月の雪一点物の京友禅

入相烈日赫赫唐辛子

横浜 正木 萬蝶

「サンライズ出雲」に眠る夜長かな

独り居の母のマニキュア唐辛子

追分の京の字うすれこぼれ萩

遠近の小京都訪ふ暮の秋

長き夜や友と雑魚寝の目覚めかな

那 須 洪、合きいち

訥弁の父に付き合ふ長き夜

八十路すぎ酸いも甘いも鷹の爪

フライパンの Pasta で踊る鷹の爪

火祭の焰に染まる京美人

萩の風抜けし本堂京干菓子

相模原 町野 広子

見ては又片すアルバム長き夜

甘納豆ぽつぽつ摘む夜長かな

長き夜や深き黙持つ美術館

唐辛子枝のまま干す長廂

京ことばはんなりひとつ秋うらら

草 加 河野はるみ

京の香をしばし留めむ秋扇

痴言は一度つきりよ鷹の爪

独り居のテレビに小言夜の長し

永き夜や羊を数へ山羊かぞへ

窓外に耳澄ましある夜長かな

さいたま 寺町 知子

菜園の水甕に空唐辛子

糠床を守る歳月鷹の爪

塔影黒し釣瓶落としの京の町

秋暑し京の森からけものの気

向き合うて狛が目を剥く夜長かな

曲淵 徹雄

長き夜を悪戯のごと耳鳴りす

唐辛子赤き本音を晒しけり

秋風に項濯がせ京言葉

密やかに月光恋ふる京女

長き夜や彼の地へ誘ふ「城達也」

田中 弘子

一湾の灯り増えゆく長夜かな

村の軒魔除けとなりし唐辛子

北京ダック少し多目の貝割菜

西京漬の皮目逞し鼻曲鮭

推敲や言葉探しの長き夜

平塚 丸屋詠子

高崎 原田秀子

物思ひして入れすぎの唐辛子

吊るされて白壁彩ふ唐辛子

平安京を蘇らす秋の風

唐辛子爪先あがり魔女の靴

栗を茹で季節の味を京菓子舗

唐辛子カプサイシンは立役者

京劇の結末かなし夜寒かな

ジムノペディくり返しきく夜長かな

母を知る母の句集を読む夜長

さいたま 本橋稀香

妖気漂ふひとり芝居を観る夜長

長き夜や巡回ナース灯を消せば

枕辺に選りし童話の夜長かな

唐辛子乾びきつたる副葬品

長き夜のリュートの調べ沁み入りぬ

幾世代京の町屋に秋日沁む

調合は激辛味よ唐辛子

紅葉且つ散る東京のビル風に

京町家にて京簪を秋の昼

芝浜をイヤホンで聴く長き夜

荒井 俱子

さいたま 池田雅夫

長き夜子等とおとぎの中にをり

長き夜をたつぷりと寝て健康に

胸中に燃ゆるものあり唐辛子

独り居の一軒家夜の長長と

脇役に徹す生涯たうがらし

唐辛子顔くちやくちやにして涙

京劇の姫の白塗り通草の実

腰巻の干しある軒端唐辛子

唐辛子吊りて魔除けか蔵の町

熊倉千重子

反町 修

強風にめらめら畑の唐辛子

長き夜や読了したる水明誌

長き夜枕許には深夜便

秋うらら往時を偲ぶ京都御所

語り部の語尾の親しさ夜長し

唐辛子干して炒めて赤極む

京の路地千本格子に秋夕焼

目覚めし子母のベッドへ夜長かな

秋の夜や消えし故郷の「京ヶ島」

夜の長しもつたいないの昭和生き
看護士の夜長見廻る足の音

深谷 井上燈女

捨てし句を拾ひ直して夜長の灯

南蛮の赤色増すや鬼の爪

大花野京山脈の丈澄みて

通り名を覚えて京の残暑かな

さいたま 下川光子

秋風やゆらりゆらりと京とうふ

長き夜の口中遊ぶ和三盆

学食の引つ張りだこに唐辛子

懐メロの夜長のラジオくちずさむ

天空に流星雨待つ夜長かな

利根 倉田星歩

長き夜や目盛動かす星座盤

長き夜を徒然に聴くラジオかな

朝月夜京師に響く鐘の音

唐辛子旨い蕎麦屋は角の先

唐辛子花束のごともらひけり

若狭 飛永 鼓

吊されてなほ凜とする唐辛子

振り返り語り合ふのも夜長かな

吊るされも意地張り通す唐辛子

秋鯖を背負ふ山越えそこは京

さいたま 梅澤輝翠

朝市に花と見紛ふ唐辛子
唐辛子きかせて女将酒のあて
写真館京緋色ゆかし七五三

長き夜や愛猫と観るネコ物語

長き夜や不意に鳴り出すオルゴール

夜長し母の手擦れの鯨尺

鬼石 野口和子

長き夜の鏡置かれし山羊の小屋

玄関に吊るす厄除け唐辛子

音出でて干し加減良き唐辛子

京菓子の抹茶の香り秋思かな

「熊合草」をゆつたり捲る長き夜

鴻巣 大塚茂子

弟よ明日は退院長き夜

天高し京の旅路の三千院

鈴虫の声転がり来京の寺

唐辛子小さなうそは許さるる

さるばるの郷に色づく唐辛子

熊谷 越田栄子

朝市や笹に山盛り唐辛子

秋深し煮物はんなり京の宿

地球儀をくると回す夜長かな

世界遺産巡る夢見る長き夜

京焼に美味なる肴新走

横 浜 福 田 千 春

さいたま 森 下 山 菜

説あまた卑弥呼の謎や長き夜
長き夜の九九の暗誦滞る

唐辛子母好きな子の反抗期

唐辛子吊り独居の不安まぎらはす

秩父路の軒端いろどる唐辛子

さいたま 井 上 玲 子

杉 戸 佐 々 木 史 女

菜園に紅を競へり唐辛子

京焼の皿に新蕎麦食そそる

鳥獣の戯画とたはむる夜長かな

しみじみとリルケの詩集夜長かな

病室の吾子は寝ねしか長き夜

笹 本 啓 子

さいたま 綿 引 ま り こ

語部の声の上げ下げ長き夜

長き夜セピア色せし文を読む

唐辛子吊して誰ぞ住む気配

秋の宵三味の音洩るる京町屋

借りし本読んでしもうて夜長かな

池 田 珪 子

清 水 桂 子

青青と地まで届きて唐辛子

朝の日に色づいてをる唐辛子

吊されて紅の深まる唐辛子

西の京道尋ねれば柿たわわ

長き夜の弓手奏づるピチカート
デッサンの夜長に嚙る麺麭の耳

長き夜や百畳の湯に吾ひとり

裸火で炙る南蛮釣り昼餉

親離れ子離れ京の秋つばめ

見残しの夢に拘わる夜長かな

吊るされて艶を増したる鷹の爪

みやげ屋の軒借る京の秋時雨

もみぢ一枝持ちて踊るや京舞妓

鷹の爪売る七味屋の玻璃秋夕陽

点滴の雫数ふる長き夜

唐辛子マティスの赤とハーモニ

ワイン手に夜間飛行の夜長かな

鷹の爪女は赤き爪を研ぐ

東京の三角ビルに丸き月

脇役の心地よきかな唐辛子

ピーマンに五臓六腑のなかりけり

長き夜や無心の我に湯の滾る

色褪せし恋文いかに長き夜

紅葉狩友生粹の京女

韓服の袖のふくらみ唐辛子

越谷 阿部幸代

さいたま 野村美子

下宿屋の切り盛り青きたうがらし
喜寿祝ふ「感謝」の二文字夜長かな
長き夜の光の行方アインシュタイン
秋淋し歌ふは「東京ラプソディー」

裂織の機の音響かせ夜長かな
ラーメンを分け合ふ二人夜長かな
道の駅赤く艶やか唐辛子
秋惜しむ京の茶屋街三昧の音
石庭の茶席の萩や京友禪

唐辛子ジャズシンガーのイヤリング

若狭 畠中風花

憧れの宇宙への旅夜長かな

宮崎チアキ

地藏盆若狭に京の匂ひあり

東雲や酉の一声唐辛子

長き夜や机上にラジオ深夜便

唐辛子漬物の味引き出せり

稽古場の師匠と弟子や鷹の爪
ざわめくや京の竹林秋の風

マニキュアの手で刻む赤唐辛子
秋風や夢に描きし京の旅

人類の欲の噴き出す夜長かな

さいたま 石関六弦

小駒さち子

見た夢を夫と語らふ夜長かな

夜長し源氏の君を追ひかけて

先人の数多の教へ唐辛子

阿蘭陀の甘きピーマン日本へ

網棚に東京みやげ秋彼岸
まつすぐに東京湾を鰯雲

釜炊きの新米うまし西の京
爽やかな風と一緒の京の旅

エンディングノート書き足す夜長かな

秋谷風舎

北出久美子

かな女の百句口ずさむ夜長かな

採れたてのピーマン不在のドアノブに
夜長とてつい深酒に午前二時

キツチンの壁飾りなり鷹の爪

老猫に添寝つき合ふ長き夜

見た目より選ぶ名入りの唐辛子
焼くもよし漬くもよし京秋の茄子

ルンバしか語る者なし長き夜
京都はや山粧ひて吾迎ふ

唐辛子花より赤く束ねたり
赤の中一番の赤鷹の爪

朝市に絵の具ひとはけ唐辛子
長き夜毛糸の玉を散らかして
十六夜を指す手に添ひて京の径

東京 山中いちい

晩学の息子に母の夜の長き
負ける日もありぬたつぶり唐辛子

晩秋の京橋からん下駄鳴らす
長き夜や親子で巡る露天風呂
東のみやこ東京秋の二重橋

吉川 杉浦千祐

瓶に挿せば花となりけり唐辛子

辞書耽読言葉と出合ふ長き夜

京芋を炊いて月見のあてとせり

明けぬ夜は無しと知りてもなほ夜長
鷹の爪靴下に入れいざ散歩

さいたま 駒谷行雄

子守唄いまだ聴きたき夜長かな

長き夜プラスの響き深く染む
長き夜苦く飲み干す三杯目

夕映えの貰ひ火のごと唐辛子
相輪にゆるりと上る京の月

さいたま 横山礼子

京劇の余韻の冷めぬ月今宵

唐辛子近寄り難き赤さかな

鷹の爪火を秘めしまま知らぬふり

句材湧きまた消えて湧く夜長かな

妻の留守居処のなき夜長かな

播磨 進

八十路とて生き様振り返る夜長

締切を睡魔が襲ふ夜長かな

碁敵が土産と言ひて唐辛子

唐辛子とんがり帽子に色添へて

滞京の未練断ち切る秋の風

鈴木藻好

交番の消えぬ灯りや長き夜

唐辛子振れば秘密の音のして

古民家の厨彩る唐辛子

唐辛子悪しき企みに秘め

草紅葉葬送の地の京化野

小野町子

長き夜や回り続ける焙煎機

格言が壁を埋めゆく夜長かな

ピーマンの肉詰め美味し甘き恋

車窓より京街道の夜学の灯

秋あかね大東京に人の波

大阪 遠藤人美

見つからぬピースを探す夜長かな

さいたま 清山尚己

上京もはや半世紀いわし雲

発掘の土偶の破片唐辛子
濃淡のある三原色や唐辛子

さいたま 内田恵子

京劇の銅鑼早まりて秋高し

夜長かなピーターパンと宙を飛ぶ
成功はつつがなき日常唐辛子

一面に老婆広げり鷹の爪

よろず屋の空瓶に咲くたうがらし

ピーマンやちようちん袖のふはふはと

ペペロンチーノつまみ出されし唐辛子

鈴木和子

長き夜や鍵盤紡ぐ夜想曲

平野 楽

長き夜にあれやこれやと句をひねる

長き夜の文芸雑誌全頁

嫁ぐ前父母と訪ねし京や秋

声枯らしお先にどうぞ唐辛子

来訪の息子と歩く夜長かな

秋深し洛外の人京のひと

秋高し千本鳥居彼方まで

古の京を留むる紅葉かな

南蛮を噛むネパールは山の国

横浜 石井妙子

長き夜を昭和のテレビタイムかな

日記にも書けぬ事有り長き夜
床を抜け一人露天湯夜長かな

三浦真由美

何回も眼鏡ずり上げ夜長し

並び行く仮装の子等やたうがらし

足早に京舞の妓ら寺紅葉

秋夕焼蔵に錆びたる南京錠

食フェスタ金風の野の平城京

第一京浜秋の海へとただ一人

長き夜や残業続く水曜日

さいたま 吉川拓真

朝と同じ夜長の電子掲示板

長き夜や心を占むる澄雄の句
病院の夕食夜長の始めとし

白岡 岡本和男

拉麺の三辛となるたうがらし

鷹の爪吊られまつかな自己主張

東京や東京駅に天高し

軒に干すひりひり赤き唐辛子

ボケモンの東京ばな奈秋の雲

久闊の友の上京秋の夜

秋麗紅殻格子に京女

さいたま 小田三茅

さんびらの名脇役や唐辛子

しわの手でしわの南蛮ちぎりけり

鷹の爪織部に乘れば輪になりて

長き夜老化の話尽き果てぬ

手作りのハーブリースに鷹の爪

午前二時眠気覚ましの唐辛子

友となる深夜のラジオ長き夜

白露の京の里山ひとり旅

秋時雨京ことば待つ駅ホーム

おしやべりの相手がほしい夜長かな

帰り待ち椅子にうたた寝長き夜

米びつの虫除けの赤鷹の爪

漬物に備はる味や鷹の爪

はとバスの東京巡り秋一日

乱気流揺るる夜長の読書灯

クリステイの二転三転夜長かな

旅立ちに父の一言唐辛子

千年の御所の白砂京の月

京格子町家を過ぐる秋裕

羽島秀子

武田重子

稲野幸子

十指に足るバケットリスト夜長かな

ミシン踏む母の丸き背夜長かな

長き夜や嵩持て余す広辞苑

「サンライズ」より見送りしたる夜長の灯

上京の友の方言休暇明け

台風や半日ずらし京都駅

軒下に吊るしうま味を唐辛子

手料理に追唐辛子失礼な

萩ゆるる茶屋の京菓子おちよぼ口

数独の消しゴムの滓長き夜

ページ繰り活字流るる夜長かな

長き夜や仄かな闇にブルーライト

唐辛子過ぎる足らぬは恋に似て

ピーマンの矜持と見ゆる艶肌よ

葡萄棚京紫のシャンデリア

秋の宵そぞろ歩きの京言葉

晩学の墨をする音夜長かな

えんがはに干唐辛子出番待つ

山道に地蔵二体の夜長かな

鞍馬寺たいまつ走る夜長かな

山下ユリ子

森田恵美子

緒方みき子

さいたま 木谷葉子

明王の炎髪立つる唐辛子

葉隠れに魔女の爪めく唐辛子

逢魔時はまち畑の唐辛子

数独のマスあと五つ夜長かな

西の京娘杜氏の今年酒

老友の訃報受けたり長夜なり

枯れてから真骨頂なり唐辛子

うつぶんを晴らしたいのか唐辛子

東京の十九時の秋ビル灯り

三歳の秋一十百千京言へた

目ざましの文字盤光る長き夜

ピーマンの空ろを埋むる夕仕度

イタリアンの漆喰壁の唐辛子

弱音器つくる夜長のモーツァルト

左京区東寺領町疎水秋

長き夜の窓から聴こゆブーラムス

長き夜の谷間に流るセロの音や

秋色の橋しづしづと京舞妓

京和紙に筆走らせて秋夕焼

さんびらに唐辛子振り我が家流

さいたま

石黒由美子

かな女の百句じつくりと読む長き夜

鷹の爪ひとかけバスタの味きまる

晴天の時代祭の京装束

秋気澄む京の土産の金平糖

京野菜の唐辛子なり甘味あり

京菓子の色はんなりと秋茶会

子の残すピーマンみんな母の皿

一軒では帰れぬ銀座長き夜

唐辛子吊すそんなに食べるのか

吾が畑ピーマンばかり良く実り

陽が落ちて捻くり出した唐辛子

干乾びていよよ火の付くたうがらし

唐辛子食べて謀叛気起きさうな

長き夜や音なく猫のすり寄り来

指輪旧り抜くに抜けない夜長かな

国勢調査さらさらと長き夜

地区の班合併賛否長き夜

気になりて幾度点眼長き夜

長き夜竹から漏るる光やはし

網締めのような神木長き夜

和歌山 葛城千世子

町田 瀬戸雄二郎

東京 松山清子

さいたま 森 和子

話題本枕となりて夜長かな
味気なき暮らしに一片鷹の爪
つけ爪を競ふ乙女ら唐辛子
東京の空にさよなら雁渡る
東京に戻る荷の中林檎の香

さいたま 太田 貴

寝静まる頃のコーヒーさあ夜長
てのひらのマップ夜長の夢想旅
漬物樽に散らす赫赫たうがらし
和の国に暮らす氣づまり鷹の爪
菊なます深読み誘ふ京言葉

上 尾 室井早都子

京の町和服の目立つ敬老日
読み耽る伊勢物語夜長かな
新豆腐のぼりに惹かれ京の店
長き夜や「いつでも夢を」口遊び
唐辛子鉢でちよんと金平に

大阪 海老名ノルン

秋涼し往き交ふ人の京ことば
埒も無き夜長の電話延延と
書きて消す日記改め書く夜長
老宅の魔除けに吊す唐辛子
韓料理味の決め手や唐辛子

さいたま 香田裕誌

ほの暗き京の老舗や秋時雨
厨事仕舞ひてよりの夜長かな
木の窓やベスカトーレに鷹の爪
長き夜や枕の合はぬ旅の宿
根詰むる癖は母似の夜長かな

さいたま 穴戸洋子

長き夜の胸に冷たき秒針音
長き夜の終はらぬ母の懐古談
鷹の爪米櫃に貼る祖母の知恵
拉麺の辛さ極限唐辛子
行く秋の巡る京都や姉妹旅

山戸美子

長き夜や夫の寝息と雨の音
籐椅子でスマホ眺むる夜長かな
放たれし言の葉つらし唐辛子
ピーマンや首振る吾子に我慢説き
丹波栗勧むる店主の京言葉

伊藤美津子

仕立物終ふる夜長の湯浴みかな
米櫃に穀象除けに鷹の爪
京染や小袖の似合ふ秋の空
人の出も京の都は錦なり
京舞や秋の稽古の華やかさ

田中章嘉

長き夜や三本立ての夢を見る

門限を守らぬインコ夜長かな

唐辛子赤き命は延々と

鷹の爪堪忍袋つくるひぬ

ふじばかま職人技の京人形

長き夜や父の一押し志ん生聴く

母の爪丁寧に切る夜長かな

唐辛子下がる店先夜市かな

京町家民泊となり秋暑し

名画座に京マチ子ゐて菊の酒

うだる日はぴりつと効かす唐辛子

猫もかく幽かな麝長き夜

若者ひとり島にあつばれ唐辛子

太平洋の上を夜長の飛行中

京の照葉に歓声あげる外人さん

北京行きジャンボの影や秋の空

長き夜に地球が月を食べ尽くす

ペルセウスが夜長の空を襲いくる

鷹の爪米櫃の中留守居する

唐辛子物干竿にゆーらゆら

和歌山 高橋満耶子

東京 石田慶子

さいたま 西幅公子

飯田忠男

いにしへの平城京や秋の雲

「おいでやす」紅葉の宿の京料理

唐辛子舌に貼り付く種ぱりり

無くし物捜す術なき長き夜

来し方の苦し辛しや唐辛子

マーラーの調べに酔ひし長き夜に

長き夜やポーの黒猫怪奇読む

鷹の爪一束壁にアクセント

脇役をうまくこなすや唐辛子

ライトアップの紅葉並木や京の街

長き夜古き写真を整理する

長き夜歎異抄をまた手にす

秋深し京都ゆつくりひとり旅

味ぱりり言い得て妙の鷹の爪

漬物の味深くする唐辛子

長き夜や一気に仕上ぐベビー服

母と子に返る電話や長き夜

唐辛子を広げし筵入日燦

くねくねと自由に枯れて唐辛子

図書館の厚き本読む夜長かな

さいたま 綿貫ひさの

山岸久美子

東京 畑宮栄子

さいたま 湯浅 和

高高と飛び世界新出る長き夜
長き夜に稚児初めて三步出る
たうがらしつなぎ白壁インテリア
京の紅葉トロッコ列車二人旅
秋の海京葉線で眺め行く

さいたま 森下美智枝

野に山に灯の等し長き夜
長き夜や呼びもどしたき鳥の声
柔らかき闇に奥あり長き夜
打ちとけて語りあかせり長き夜
無人駅への一本道や長き夜

和歌山 西浦千枝子

新米に西京焼は「銀鱈」で
平安京藤原栄華の司召
煮売屋の京芋はつこり秋麗
好きだから敢えて言います唐辛子
愛犬の寢床定まらぬ夜長かな

北山建治郎

長き夜や「人生相談」音読す
正面にはほゑむ達磨長き夜
苦手から返上したるたうがらし
大雑把許せ朝採りピーマンよ
鷹の爪バージンオイルとランデブー

所沢 飯室夏江

長き夜や真暗な空に背中むけ
長き夜や目覚めて空を見あぐる時
唐辛子赤き一枝土間にあり
露寒の京に旅する人ありて
秋高し遙かを偲ぶ平城京

三森恵子

寝付く迄お話果てぬ夜長かな
マラーを大音量に聴く夜長
びかびかの唐辛子美し束ね干す
壇に詰め干し唐辛子一年分
PTA京の秋陽の旅遙か

宮代 関谷多美子

長き夜や睡魔が襲ふ受験生
長き夜や推理小説読み終ふる
長き夜やむづかる赤子寝かしつけ
長き夜や言葉のやはき京女
連続のドラマ見てをり長き夜

和歌山 川崎道子

長き夜ラインに近況綴られし
長き夜起きてパソコン見てをりぬ
飾られし何年薬で唐辛子
糠床やまつ赤な色の唐辛子
唐辛子貰ひし友よ健康に

和歌山 南條さわゑ

さいたま 樋口元美

しみじみとかな女の百句読む夜長
長き夜か介護施設の窓灯り
唐辛子真つ赤なりースオステリア
輪切りの唐辛子少し自己主張
京菓子の小さき秋やはさみ菊

東京 柳父はる

灯ともし京の家並と秋簾
長き夜やとところどころの夢会話
長き夜に推理小説出口なし
指の朱挑むが如し鷹の爪
秋扇やゆつたりゆくは京の人

和歌山 嶋田洋子

恋の話を遺影と語る長き夜
曾祖父の説教短し鷹の爪
京の寺男坂登る卒寿かな
長き夜や不器用に生き卒寿かな
ピーマンの肉詰三つ弁当に

さいたま 阿部貞代

京劇の銅鑼鳴りひびく秋の宵
聴きのがしのラジオ流るる夜長かな
たうがらし見沼の土に添ふる色
鷹の爪父の料理に惜しげなし

さいたま 糸井しるく

毛筆で御礼の書状夜長かな
長き夜を夢うつつに寝返りす
花籠の真中に御座す鷹の爪
「東京物語」親子の姿秋深し

所沢 関根千恵

京都路へ徒然の旅秋微雨
止り木の碧いカクテル長き夜
一生を焦れて咲くや唐辛子
束ねられ軒は灯点る唐辛子

草加 持永喜夫

長き夜や最後のピースを弄ぶ
唐辛子夫の鼻先玉の汗
唐辛子燃えて流るる体脂肪

さいたま 築部真美子

枕頭を猫と競ひし夜長かな
夜長月帳の吐息香り聞く
京祖廟眼に紅葉射す手水龍

水 琴 窟 (水明集九・十月合併号鑑賞)

池田雅夫

夕張の廃坑抱き山滴る 横山礼子

筑豊炭坑・常磐炭坑と並び夕張炭坑は一時代の象徴であった。その炭坑も今ではほとんど廃坑になってしまった。夕張市の東方には大雪山そして日高連峰がある。「山滴る」は山の精気あふれる清涼の感を称えている。雄大な山とその裾に広がる夕張を「抱く」というスケールの大きさを圧倒された。

晩 酌 に 適 ふ 極 上 初 鰹 香田裕誌

黒潮にのつて東上する鰹。関東近海では夏の初めごろに捕れる。それを「初鰹」といつて珍重されている。近海で捕れた新鮮な鰹は人々の食卓を飾り欠かせないものであった。冷蔵技術の進んだ現在も初鰹という感覚が残っている。食卓にのる初鰹であるが酒の肴としても絶品なことは確かである。

まだ風の怖さを知らぬ若葉かな 岡本和男

夏の始め木々の葉は新しく艶やかで美しい。冬を耐え抜いた木々ではあるが、細枝にふきだした「若葉」は時として強い風で折れてしまう。「まだ怖さを知らぬ」の擬人法によって共感され易くなった。そうした工夫や推敲を見習いたい。

子の部屋の灯り仄かに宵螢 西川照代

郊外にまだ田んぼがあったころ、用水路などには螢が飛び交っていた。近年は宅地化がすすみ、田んぼがすっかりなくなり、螢もいなくなった。「子の部屋の灯り」を消して螢を観察しているのだろうか。あるいは捕ってきた螢を暗くした部屋へ放ったのかも。いや、「宵螢」であるから前者であろう。

連山の貌を逆さに夏の湖 平野 楽

ぐるりと緑に囲まれた「夏の湖」は山の影や雲を映して青く清しい。雄壮な山々を映す湖。映すと言わずに「連山の貌を逆さに」とした工夫が連山を親しくさせている。波もない「夏の湖」にくつきりと、逆さの連山が映っている。それを眺めながら湖畔の遊歩道を散策しているのであろう。

梅雨の月水面見つむる観音像 小野町子

くる日もくる日も降り続く梅雨。むしむしと湿度が高く、不快な時期である。一時的に晴れる「梅雨の中休み」であろう。池の面に映る「梅雨の月」と「観音像」の半眼の視線が一致しているのだ。あまり気づかない視点に独創性がある。

戸一枚南部曲家明早し

北山建治郎

南部地方では「曲家」という特徴的な建て方の家が多い。母屋と馬屋をつなげ、冬の雪や寒さの対策とした。母屋には戸が一枚。明け方の光を取り込み、「明早し」の感が強い。「戸一枚」に南部の暮らしの素朴さが表われている。

星割れて急発進のてんと虫

田口文子

「てんと虫」の代表的な「七星天道虫」。作物につく「あぶらむし」を食べる益虫で、西洋では『神様の虫』と称されている。葉先などにのぼりつめると、パッと翅をひらき飛びたつ。その姿を「星割れて急発進」と詠んでいるのだ。

はつたいに忘れし訛よみがへる

海老名ノルン

「はつたひ」は「麴」と書き、いわゆる「むぎこがし」のこと。幼少のころ、故郷で食していたのであろう。久方ぶりにはつたいを食べていると、その懐かしさのあまり思わず「国訛」が出てしまったのだ。ほほえましい一場面である。

ぼんぼんと黴叩く店神保町

鈴木藻好

「神保町」は言わずと知れた古本屋街。学生に限らず、昔からのお馴染みさんも多い。店頭での立ち読みの光景が目につく。「ぼんぼんと黴叩く」は立ち読みを追うためか。

潮の香を纏ふ日除や浜の家

森下風湖

海に面した「浜の家」はことさら日射しが強い。夏の日盛りを凌ぎよく過ごすために「日除」を設ける。長年使用した日除であろう。潮風と強い日射しで色褪せてしまった。傷みもある。「潮の香を纏ふ」がそれを表わしている。

街灯の届かぬ闇や牛蛙

三浦真由美

数十年前までは近郊の田んぼで「牛蛙」の鳴く声を聞いたものだ。今では宅地造成で田んぼがすっかり消えてしまった。暗闇の中で「ボーッボーッ」と無気味な低い声で鳴く牛蛙。うるさくて眠れない、なんてこともよく聞かされたものだ。

短夜や難解の書繙きぬ

南條きわゑ

「短夜」と「明易し」は同義であるが、一睡後の「短夜」の感覚は「明易し」よりも濃いといわれる。「難解の書を繙く」には、たっぷり時間がほしいものであるが夜が短いがゆえに、却って夜明けの明るさを求めているのであろう。

紫の花よりしづく梅雨の朝

菅原靖子

「〇〇の花」と特定せずに「紫の花」としたところに趣がある。読者にあれやこれやと想像させる効果がある。梅雨の時期の紫の花とは、やはり「紫陽花」ではないだろうか。

大村節代 選

鼓笛集

木がらしや雨戸に寄する山の声

秋谷風舎

島宿の静寂が友や鮎食ふ

ことごとく試す地酒や海鼠噛む

潤み眼の河馬の飛込む水の秋

森下山菜

台風来おほみづなぎは眼の中へ

秋うらら浄土の旅は軽装で

木洩れ日にひよいと顔出す父乞虫

小林京子

赤蜻蛉電線七重八重の空

猪に放つ一発里の山

呼び止むる人あるやうに金木犀

「ホッパ車」の列長々と葛の花

極上の紺紫や秋茄子

阿部幸代

線路の柵に老いし親子と鳳仙花

杉浦千祐

秋夕焼タンカーゆくり東京湾

長き夜や子はAIと問答す

名月や碓氷峠の橋の上

石関六弦

秋麗ゆるりとひらく鯉の口

タンカーのはるか往き交ふ秋の海

ゆらゆらとすらつと消ゆる蜻蛉かな

吉川拓真

蠟燭のごとくは揺れぬ野鷄頭

とぐる巻く竜の収まる秋の雲

芒の穂銀色の中そぞろ行く

畑宮栄子

秋桜の倒れてもなほ強くあれ

葛の花多摩川の土手にはびこりて

秋の空世界の国旗はためきて

世界旅行の大屋根リング秋の風
秋の夜に静かなアードロインショー

くれぐれも言葉を選び胡桃割る
ひっそりと榎の実拾ふ吾がをり
榎の実が屋根叩く音寝落ちして

人前の罵声に堪へておけさかな
過ぎ去れば新たなもの生む野分かな
傷つきて漆紅葉の夕明かり

夕立や追ひかけられてコンビニへ
顔を出す我が家を守る守宮の目
昼さがり風鈴の音ゆきわたる

青空に何語るらむ紫苑ゆれ
名月や恥づかしがりて雲流る
秋の川ひたすら流る我が人生

句作練り頭ほぐして夜食かな
秋の蟬聴きし日暮や子ら帰る
サクサクと尾花揺らぎし遊歩道

森下美智枝

山中いちい

川島夕峰

樋口元美

大島千恵

糸井しるく

鼓笛集作品評

大村節代

ことごとく試す地酒や海鼠嗜む

秋谷風舎

これぞ冬の旅の醍醐味であろう。今年はその極暑に堪えて
やっと、爽やかな秋にと思つたら、いきなり冬になつてしま
つた。これから日本は、夏と冬の二季になつてしまふのであ
ろうか。島宿は人情も厚く、静けさも一入。海鼠や鰯を肴に、
試すと称して地酒三昧。乾杯！

秋うらら浄土の旅は軽装で

森下山菜

長い一生には、楽しい事も憂き事も沢山あったが、せっか
く浄土に招かれたのだから、身も心も軽やかに、阿弥陀仏の
下へと！ 秋うららの季語がやさしく盛りあげる。

赤蜻蛉電線七重八重の空

小林京子

赤蜻蛉に誘われて、ふと空を見上げると、電線だらけのお
なじみの空。かつて「ああ無情」の映画でフランスの地下道
に息を呑んだが、わが国は相変らず。しかしこれも風物詩な
のであろうか。

私の好きな一句（自句自解）

岡田宣子

初夢や幼き頃の家の間取り

雪国出身の私は雁木のある町家で育ちました。間口
が狭く奥行の長い家です。

格子窓から車や人が行き来する通りを見下して楽し
んだりした。明り取りのある部屋では祖母が長火鉢の
横に座っていた様子を、この齡になつて初夢に見ると
は……。懐かしく詠んでみました。

俳誌望見

梅澤輝翠

「沖」

令和七年九月号

通卷六六〇号

主宰 能村研三

発行所 千葉県市川市

昭和四五年 能村登四郎が市川で創刊 師系 水原秋桜子
能村登四郎「登四郎の美学を継承しルネッサンス「沖」を
めざす」を理念とする。月刊

主宰詠「暮れ合ひ」十句より

暮れ合ひの網戸に漉さるドビッシー
梅漬ける壺中の闇をひしめかせ
父の日の面映ゆきこと終りけり
作務僧がよつてたかつて梅落す
磨りためし墨の粘りや梶一葉

二句目 三日二晩干した梅を常滑焼の壺の中に丁寧に一粒
ずつと戻していく状態は正に梅にとっては闇の中でひしめき
合っている如です。

四句目 僧の方々は普段物静かな動きの中での日常生活を
送っておられるかと思われませんが、梅落しの作業ともなると
よつてかたつてとはなんともユーモラスな表現なんでしょう。
五句目 七夕に梶の葉七枚に願い事を書いた遠い昔を思い
今も尚里芋の葉にたまつた朝露で墨を磨り願い事など認めて
みたいものです。

蒼茫集 四九名 各六句より五名

咲き初めは月白色や朴の花 大川ゆかり
風死して静止画像の中にある 内山照久
梅雨に入る雨音で知る樹々の丈 能美茅柴
火のスパイス入れて溽暑の中華鍋 峰崎成規
僧百人いつせいに立つ涼しさよ 林 昭太郎
潮鳴集 一二〇名 各五句より五名
白南風や地球見直す逆さ地図 鈴木基之
青田波とは折り返す波持たず 川高郷之助
碧き風青き香を呼ぶ茅の輪かな 根本秀治
昼寢覚この世の水を飲み干せり 村上葉子
夏至といふこの天空の大神計 中村重幸
沖作品 主宰選 一二四名 各五句より三名
麦秋やゴッホは風を聞き分ける 石原 杏
ひまはりや明日しか見えなかつたころ 清水陽子
團菊祭虎が雨降る楽日かな 小泉芝雲
創刊五五周年を迎へられましたおめでとうございます。
能村研三主宰が創刊二十五周年の三〇号を記念して記
念号を発行二十五周年をきっかけに登四郎は「写生新論」を打
ち出し、「沖」をもつてからこの頃人事を詠む人が多く「何
がどうしてどうなった」という句が多くなったので「モノ」
を詠め具体的に詠め、要するにものをよく見つめると実像か
らもう一つの実像が生まれる。それが写生に徹する面白さで
あると、私のいう新論とは永遠の新しさをもった句のことを
いいたいのであると。
そして五十五周年は「ゴーゴー沖」を標榜として開催した
いと記されてあります。ますますのご発展を祈念致します。

句集喝采

菅原卓郎

◆川口 襄「川越祭」

喜怒哀楽書房

著者略歴 昭和十五年長岡市生。平成二年小澤克己に師事。平成四年「遠嶺俳句会」創立に参加。「遠嶺」編集長。平成十八年幹事長。平成二十二年「爽樹俳句会」発足に参加。平成二十六年「爽樹」代表。令和二年「爽樹」名誉顧問。俳人協会会員。

作者の第五句集。題名は所属結社が季語として取り入れている「川越祭」から命名。祭で山車の人形どうしを挨拶させるのが「曳つかはせ」との事で多くの作品に用いられている。

若葉風 法灯 絶えぬ奥の院
夜這星ひとつ走りて漁火に
かざろひの草原を発つ熱気球

第一句、弘法大師が御入定されて一二〇〇年。灯籠堂では「消えずの燈明」が燃え続けている。高野山の神祕が窺える一句。第三句、場所は佐賀路であろうか。春の草原を色とりどりのバルーンが次々に飛び立ってゆく。乗ってみた。

身の内に滾るものあり冬木の芽
螢飛ぶ草書 楷書と入り乱れ
浅春のひかりを弾くオールかな
月仰ぐ万葉人の心持て

第一句、冬の木の芽には力が有る。今にも弾き出そうな力である。頑なに内に秘めているが時期がくれば一気に花開くパウーだ。第二句、螢の動きはブラウン運動の如く全く予想出来ない。その動きを草書楷書に見立て読みの困難さをうまく表現している。螢の残影は素晴らしい。

◆家田あつ子「旅 靴」

文學の森

著者略歴 昭和二十五年東京都浅草橋生。平成十二年「蓆」(山本一步主宰)入会。平成十六年「蓆」同人。令和六年第二十三回蓆賞受賞。俳人協会会員、横浜俳話会会員。

所属結社の主宰方針「平明な言葉で」通りの作風。学生時代ワンダーフォーゲル部に所属し野山を駆け巡った経験から醸し出される句が散見される。又伊豆大島での生活体験もあり、自然に対する細かな観察が良く表現されている。

薄紙を解けば目覚めし雛かな
状差しに一時納めて種袋
茅の輪くぐる鏡の中に入るやうに
山滴る石段に置く旅靴

第一句、押入れから引き出した箱を開けると、中から丁寧に和紙で包んだ男雛、女雛、三人官女等が次々に現れる。一体一紙を捲れば平安調の「かんばせ」が現れる。正にお目覚めですかと声を掛けたい。第三句、茅の輪をくぐるには順番が有るとの事。仰せの通り第一歩を踏み出すと異次元の世界へ踏み込むような錯覚に襲われてしまう。

如雨露の水上手に躲き秋の蝶
秋耕の母に小さき力瘤
時計の針正して冬の立つ日かな

蠟梅のむかう甘酒茶屋の見ゆ
第一句、蝶の習性を具に見ており、いくら如雨露の水を差し向けても上手に躲げて飛び去って行く。秋の庭仕事のひとつ。第四句、蠟梅のほのかな香りに負けじと甘酒においが漂ってくる。目を遣れば甘酒の幟が見える。春が近い。

りんどう忌の記



青木鶴城

いつもの水明晴れとはいかず、少し足下の悪い天候でしたが、例年通り長谷川かな女師の忌を修して「りんどう忌」がさいたま共済会館に於いて開催されました。

参加者は三十六名。最近どの大会に於いても四十名を超えている状況からは少し寂しくはありましたが、師の写真の微笑みが見守る中、楽しい大会となりました。

司会の日高道を総務部長の開会挨拶の後、師への黙祷を捧げ、山本鬼之介主宰の挨拶を頂き句会へと移りました。(投句総数七十二句、互選は五句選、季音「雪」作家は十句選)

長寿のお祝い

米寿を迎えられた星野和葉氏、喜寿を迎えられた河野はるみ、関谷多美子、阿部幸代の各氏に主宰より夫々の名前の文字が詠み込まれた句の色紙と色紙掛けが贈られ、皆様よりの賛辞と拍手に包まれました。表彰された皆様おめでとうございます。

葛紅葉和蘭坂をゆるゆると
野を駆くる馬と少女よ秋の大河へ
新松子美しき古刹の多聞天
爽籟や神代を想ふ山の幸

鬼之介
鬼之介
鬼之介
鬼之介

抜講

主宰詠

菅原卓郎氏・小林京子氏

ゆるゆると磨る墨の香よかな女の忌
諸腕ひろげ我色鳥を迎へたり



長寿の方々

主宰選

天

かな女忌へ翼のやうな傘を差し 大村節代

地

色鳥や水琴窟のささめごと 曲淵徹雄

人

移りゆく杜の頁や色鳥来 菅原卓郎

——天・地・人（色紙授与）

かな女忌や紫紺床しき百句集 喜恵

いざ百賀詩魂弥増すりんどう忌 昇

真つ新な寿陵の朱文字色鳥来 直子

水底に燃ゆる石ありかな女忌 真由美

貝紫の床しき色よかな女忌 佐江

気取らずの百句の重みかな女忌 千重子

文人のゆかりの坂やかな女忌 宣子

——以上超特選（短冊授与）

大道芸の動かぬピエロ色鳥来 マスミ

句碑の辺に蝶遊ぶ夢かな女忌 栄子

文教の街しつとりとかな女忌 〃

色鳥や森のパン屋のカフエテラス 直子

花入れの柔き曲線かな女忌 〃

発行所のポストあふるる竜胆忌 道を

色鳥の群れ来て遊ぶ街の朝 由紀子

秋灯「かな女の百句」更くるまで 多美子

生涯を紡ぐ言の葉かな女忌

師の句碑にまみゆるほとり色鳥来
微笑みの写真こよなしかな女忌

色鳥来招呼するやうに乙女像

色鳥や木立の中のカフエテラス

武蔵野にたをやかな風かな女忌

色鳥やサクマドロップ彩こぼす

広縁に日なたの句ひかな女忌

遊ばむか孤愁の窓辺色鳥来

色鳥や空が大きく深呼吸

色鳥の新参者や別所沼

師の百句胸に抱ふやりんどう忌

かつて越後屋いまは三越かな女忌

師の影のはるか遠きや竜胆忌

色鳥や棧敷に御座す四姉妹

色鳥や山門高く六七羽

色鳥や風に色のせ舞ひ上がる

色鳥や渡る一群夜明け前

竜胆を飾り謳ふてりんどう忌

せせらぎの色鳥離れまた集ひ

色鳥来かはるがはるの水飲み場

かな女忌や紫覆ふ百句集

紫の花机上に飾るかな女忌

色鳥や宿る精霊森陰に

色鳥来双眼鏡を覗く僧

かな女忌や切磋琢磨の孫曹孫

金堂の杜に澄める音色鳥来

——以上特選

佐江

和葉

千重子

徹平

真理

茂子

六弦

昇

節代

ひさの

夏野

風子

鶴城

京子

はるみ

真理

章嘉

茂子

六弦

公子

楽

ひさの

宣子

翔太

修

夏野

色鳥の枝に小揺れヘラジコ消す
色鳥来荻野吟子の記念碑に

色鳥や青梅の里に吾も来たり

かな女忌や逗留句碑の影しるし

色鳥来音を絞つて聴くアリア

色鳥の葉叢のいろに色を失す

一人ひとりにかな女の一句りんどう忌

ひとところ庭面あかるし色鳥来

夫婦老い古屋の庭樹色鳥来

早飯のおむすび二つかな女忌

色鳥や柔軟となるジャングルジム

傘をさし目でなぞる句碑かな女忌

お手玉の色とりどりや色鳥来

色鳥や甘言かはす身のこなし

——高得点者の発表と賞品授与

一位 関谷多美子 二位 大村節代

三位 熊倉千重子 四位 石井喜恵

五位 丸山マスミ 六位 五明 昇

七位 越田栄子 八位 染谷風子

主宰より全句の講評を頂いた後、大村節代
編集長の閉会の辞を以って無事終了しました。

各受賞の皆様おめでとうございました。

会場の予約抽選で浦和コミュニティの会

場が取れず、天候が悪い中さいたま共済会館

までの移動となつてしまいましたが、会場確

保の厳しい状況をご理解ください。

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

尊王の志士の嘆きか法師蟬
尼寺の搗粉木太しとろろ汁
三尊のこもる雨月の薬師堂
麦とろの出汁に品良く和三盆
二尊院旅の終りの夕紅葉
本尊は歓喜天とや初もみぢ
掛茶屋の旗に太筆とろろ汁

琴の音にひかれて所望すとろろ汁
とろろ汁今なら「うん」と言へるのに
命あるものの尊厳かぶと虫
箸立てて椀をかつこむとろろ汁
深川のそぞろ歩きやとろろ汁
富士見上げ丸子の宿のとろろ汁
憂きことを搗つて忘れてとろろ汁

亮 一
稀 香
卓 郎
京 子
由紀子
マシミ
卓 郎
以上特選
節 代
喜 恵
延 昭
亮 一
マシミ
徹 平
順 子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

蒼天や秋蝶の舞ふ尊師の碑
尊敬の災害援助秋出水
尊徳の墓に野の花酒小瓶
新酒もて唇濡らす尊厳死
とろろ汁鄙の夕餉の子沢山
麦とろをすすする朱塗の夫婦箸
境涯の俳句の尊師木歩の忌

長き夜イヤホンで聴くビートルズ
仏前に桃の実二つそつと置く
主人公の嘘に本伏せ葡萄食む
大木の丸ごと一樹法師蟬
戦時下のひもじき思ひ次郎柿
栗届く連れて来られし虫哀れ
ひとふさの葡萄嬰兒のごとく抱く
白桃や赤子なけれど乳太り

和 葉
チアキ
はるみ
稀 香
由紀子
卓 郎
京 子
敏 江
士 史
妙 子
竺 仙
恵美子
峰 雄
いちい
千 春

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄 報

秋来ぬと選び手にとる靴の色
「国宝」の話題ふくらみ房葡萄
野分あと昔大工の祖父のゐて
秋の出水や線状降水帯
紅玉や小さき夕日手の中に
鈴なりの柿の木遠くに鐘の音
風神雷神飲めや歌への野分かな
親戚より梨ごろごろと届きをり
野分過ぎ満天に月残りけり
暁に雷光ありて稲肥ゆる
気にかかる事も吹き飛ぶ野分かな
カレンダー見たのかヌツと彼岸花
研ぎたての刃で剥く梨の重さかな
野分だつ髪の流れやリーゼント

みどり
鶴城
以上特選
慶 子
亜弥子
いちい
恵美子
千 春
妙 子
峰 雄
士 史
敏 江
竺 仙
みどり
鶴城



競り合ひの山車を揺るがす砂切かな
遠近の秋燈過り列車行く

秋の灯や螺鈿妖しき妻の宮
可憐夜や昭和を語る秋灯下

項羽今四面楚歌なり秋灯下
もつたりと纏れて藪へ秋の蝶

老犬の五体投地や秋暑し

秋の灯に本音のしづく文に落つ
食卓に湯気のためもの秋とし
父を見る当番の日の秋灯

「海潮音」繰れば青春秋灯下
たそがれの秋灯早し町外れ
一斉に平伏す川原野分かな
秋ともし外湯めぐりの下駄の音
秋灯を透かし鉄路の音を聴く
クルーズ船の千の小窓や秋灯

第四例会（浦和）

金色夜叉の浜辺を漫步良夜かな
コスモスの煽られどほし通過駅
良夜かな眺むるだけの月でよし
防人の歌碑に寄り添ふ秋桜
良宵ややうやう点る花街の灯
次郎吉を困らすほどの良夜かな
人影の相寄る窓辺良夜かな

石井喜恵
反町修報

星歩
萬蝶
康世
順子
徹雄
昇
千祐
萬蝶
理恵
順子
星歩
雅夫
康世
昇
喜恵

コスモス祭めとは自由に摘まれけり
コスモス野辿りて軋む小海線

西安の城壁に佇つ良夜かな
お祝ひに集ふ良夜の小家族

コスモスや記憶薄るる母の笑み
縁に寄する良夜の光り満身に

コスモス揺れ思ひは過去へ過去へ飛ぶ
誰が乗るクラシックカー秋桜

コスモスや風に靡くは人も又
思ひ出と歩む無辺の良夜かな
「鉄腕アトム」読みし縁側秋桜
風止みて落暉のほてりコスモス野

第五例会（浦和）

青海波刺し跡なぞる夜長かな
松虫やスカイツリーの見ゆる川
長き夜や「陳敏」の調べ揺蕩へる
格子戸の軒ひつそりと夜長の灯
松虫や輪唱おこる屋敷林
ちんちろりん口笛吹けば合ひの手を
長き夜や電気ケトルの滾る音

梅澤佐江報
河野はるみ

知子
〃
夏野
義子
はるみ
千祐
佐江
以上特選

以上特選

松虫やふつとほぐれしわだかまり
付添ひの簡易ベッドや夜の長し

康成も清張も居て長き夜

半生過ごし今はふるさとちんちろりん
褪せし表紙の句集繻く夜長かな

迷走のこの星なれど松虫音
夕されば松風澄むやちんちろりん

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

放ち亀に泥亀もゐて華やげり
鯛雲夫の背中に絵文字かく

絵に遊びかをり仄かに秋扇
月光を甲羅に刻み放ち亀

もみづるや京都南座絵看板
霧の中騙し絵のこと若返る

絵硝子の天使輝く秋入日

竹かごに青鳥残る放生会
放たるる魚待つ鷺や放生会

生かさるる我が身がここに放生会
啄木鳥や影絵となりぬ生家の樹

魚翻る銀の雨降る放生会
平安の絵巻の女御や秋螢

町から消ゆる肉屋魚屋放生会
見物客に混じる猫めて放生会

爽涼や植物だけの絵画展

義子
宣子
はるみ
千祐
夏野
知子
佐江
京子
慶子
千祐
鶴城
佐江
ひろこ
詠子
千春
月を
以上特選

放生会コロッケ放つ鍋の中
解き船の川に一艘放生会
放生会池辺に群るる鯉や亀
橋の辺に出番待つ亀放生会
水鏡に百鬼の影や放生会

稀香
はるみ
星歩
マスミ
萬蝶

関西例会(大阪)

森本早苗 報

タベストリー替へて新涼生れけり
忘れられ風を友とし秋簾
新涼や糊のさきたる割烹着
新涼や匂ひの残る青畳
台風禍静かに作る握り飯
新涼や遠山の青空の青
秋暑し電波時計の狂ひたり
いつのまに月のかたはらなる航路

千津子
嶋田洋子
道子
ノルン
和子
洋子
人美
以上特選

新涼ややうやく出来る尻上り
残暑厳し人類の罪責むるげに
里山の彩はコスモス濃く淡く
新涼や夫の遺せしウイスキー
満月や遙か撥ねしは鯨の尾
冠の紐切る音や秋気澄む
爽やかや加冠に臨む宮の顔
新涼や新刊の書の帯をとく
稽古終ゆ弟子を見送り宵の月
大和路の行く手行く手に萩の花
再会の師の目輝き涼新た
秋ビール嬉々と掛け合ふ猛虎どち

嶋田洋子
千世子
千枝子
さわゑ
早苗

昔話あれこれ 52

兼通と兼家の出世争い

兼通は安和二年(969)正月参議になつたが、弟の兼家は二月に中納言に昇進し、三月には右近衛大将になった。兼通は宮中出仕も不愉快になり、参内もしなくなつた。時の帝円融帝は快く思われなかつた。

ところが、兼通は天禄三年(972)十一月に関白の宣下があり、右大臣を兼任した。

その訳は円融帝の母安子(兼通の妹)の生前、兼通は安子に「関白職は兄弟の順序通りにお任せ下さい」と書いてもらい、お守りのように大事に持っていた。天禄三年十一月、兄の摂政伊尹公が亡くなると、この御文を持って参内し、帝にご覧に入れようとした。帝は日頃から兼通に厚意を御持ちでなかつたので、無視しようとしたが、兼通が「奏上すべき事がございませう」と言つて御文を差し出すと、故母宮のご筆跡で「関白は兄弟の順序に従つて任じなさいませ。決して間違えなさいませう」とあつた。

帝は母宮の御筆跡だと感慨深く思われ、兼通は内覧の宣旨を受けて退出した。

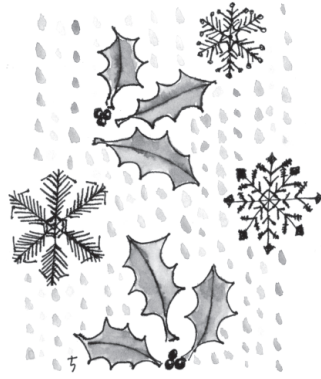
貞元二年(977)兼通は重い病氣になり、危篤状態になつていた時、邸の東の方で先払いの音がした。兼家が見舞いに来たと思ひ、部屋を整えて待つてゐると、門の前を素通りして参内されたようだと、お側の者が言う。見舞いに来てくれたのなら、関白を譲ろうと思つていたのにと激怒し、危篤の身をおして衣服を整えて参内した。

既に兼家は帝の前に伺候していた。兼家は兄が既に亡くなつたと聞いていたので、帝に次の関白職を奏請していたところであつた。帝も兼家も驚いた。

兼通は不機嫌な様子で「最後の除目を行いに参上しました。」と言ひ、関白には頼忠・実頼次男・公任の父を任じ、兼家の右近衛大将を奪ひ、治部卿に格下げした。兼家はしばらく辛い時期を過ごす。その後間もなく兼通は薨じた。天曆二年(978)兼家は右大臣になつた。

この後、兼家、道隆、道長の時代となる。

各地句会



雛の会 (浦和)

宵闇やそこだけ赤く東京タワー
この匂ひふるさと恋しむかご飯
座蒲団舞ふ仕切り直しの九月場所
自治会の仕出し弁当敬老日
宵闇の草の湿りを踏む家路
山村の日暮は早し零余子飯
平凡に生きて農婦の仕込み味噌
宵闇にくつきり浮かぶ塾の灯よ

ミモザの会 (横浜)

丸刈りの遺影に祈る残暑かな
法師蟬生き残るため鳴きつくす
赤トンボ夫の大事な捕虫網
カリヨンの先に蜻蛉のそこかしこ
肩車父とわたしと赤とんぼ
秋暑し夫も息子も五分刈りに
負け投手の泪のそばを赤とんぼ
秋茜交む校庭水溜り

水明澤つくし句会 (大阪)

晴れの日は晴れに疲るる草の花
雁渡る紅き夕日を従へて
秋風や白髪並ぶクラス会

若鮎句会 (浦和)

秋の暮波のころがす石の音
新米を掬ふ父の手黒光り
旅行けばヨモツヒラサカ蓼の花
一年の長きを思ふ今年米
あこがれの旅鳥まだ濡れ落葉
新米と古米半々寿司の舍利
新米の冷めても甘き握り飯
焼鳥で故人を偲ぶ秋の暮

鶴川山百合句会 (鶴川)

踊の輪も小さくなりて故郷よ
私を呼びに来故郷の秋の蝶
ささら萩羽根のやうなるベビー靴
盆踊見てあるだけの母のあて
過不足を忘れた地球秋出水
処暑の日の夕刊熱を帯びてをり
AIに頼る宿題夏休み
あれこれと願ふ間もなき夜這星
レントゲンの骨くつきりと秋に入る

青葉の会 (浦和)

枝豆をつまみ産地の談議聞く
晩酌に枝豆旨しあの蕎麦屋

秀子

貴

ひとみ

芳春

真

山菜

喜夫

稀香

雄二郎

史代

広子

由美子

千春

理恵

美千子

うさぎ

玲子

桂子
久美子

枝豆は夫の好物仏前に
枝豆や恩師の歌ふ武田節
白皿のまづ枝豆を友と飲む

あつといふ間に枝豆の殻天こ盛り
お通しに枝豆山と若女将
化粧こり敬老会に若作り

山伏の能舞秋の下北よ
若者の恋は一途よ青蜜柑

神戸大池句会 (神戸)

千年家を見守る漿果てしなく
無人駅この指止まれ赤とんぼ

櫟の会 (浦和)

桐一葉掃き清めたる修行僧
桐一葉取りに戻りし忘れ物

珍しく無花果に子の集まりて
平凡に暮らす月日や桐一葉

桐一葉落ちて宗家の門潜る
食べ頃の庭のいちじく採る朝

若狭水明会 (若狭)

あの辺が「竹屋の渡し」天の川
天の川星の数ほどある言葉

からころと処暑の舞子の厚化粧
桐一葉村に空家の又ひとつ

桐一葉我が人生に悔いは無し
銀河濃し飛驒の風受く野天風呂

美紗子
美智枝

美子
公子

啓子
洋子

輝翠
真理

千津子
早苗

文子
あつ子

朋子
裕誌

富子
千重子

若狭水明会 (若狭)

ことは
笑風

寛久
友鼓

友夏
風花

銀漢や万光年の物語り
上演を待つ夕間暮れ天の川

児ら遊ぶ所作は天狗ぞ桐一葉
戦乱の地にも輝く銀河あり

溜息をひとつ呑む間の桐一葉
早々と一人で渡り天の川

和歌山水明句会 (和歌山)

ずつしりと脇差しほどの初秋刀魚
稲光いくたび浮かぶガスタンク

古里やどの道行けど彼岸花
回覧板どこ回つて夜半の月

長き夜や三本立ての夢を見る
秋茄子や生きる目的議論する

脳トレや筋トレ励み馬肥ゆる
献杯やまづは固茹で月見豆

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

残業の夜食そこそこ屋台酒
斧をふる孤高の闘士いばむしり

父の愛知らずに八十路終戦日
正午打つ電子時計や終戦日

すいとんは喰はぬ父なり敗戦日
蟪蛄に見入り童女の動かさる

保人
祥子

自然
風湖

初花
昭代

和風
郁子

和子
道子

千枝子
千世子

満耶子
きわゑ

洋子
廸代

延昭
由美子

健司
早都子

洋子
昇

芙蓉句会 (浦和)

灯下親し手擦れの辞書を横におき
とりけもの野分を恐れ声潜む

ぶれもせぬ我が身裏むるや野分あと
若楠句会 (浦和)

和菓子添へ恩師に便り秋澄む日
赤蜻蛉電線七重八重の空

やは羽根をそつとつまみし赤蜻蛉
夕暮や追ひつ追はれつ赤蜻蛉

里山を籠に背負はれ赤とんぼ
秋澄めり過去まだひとつ捨てきれず

遠くへとリュックは軽し秋澄む日
秋澄むや飛行機雲は一直線

木梢に停まる猿や秋澄めり
奥入瀬の水声跳ねて秋澄めり

秋澄むや夜空の星も出番待ち
秋澄めりや門を閉ちたる剣ヶ峰

円卓の会 (浦和)

粥する若僧の背に涼新た
一葉落つ回峰明けの行者道

天領の関所の跡や桐一葉
秋夕ベグローランプの鈍さかな

税子
仁

美子

久美子
京子

弘子
操

直子
慶子

真由美
風舎

葉子
文子

鶴城
宏治

輝翠
卓郎

翔太
月を

鍵穴をスマホで探す秋夜かな 没落の過去の階級桐一葉 新涼のモカを一杯テラス席 二の腕のそつと触れ合ふ星月夜 地球めらめら新涼とは名ばかり	道子	京子	修	亮一	鶴城	珊瑚の会（浦和）	秋の朝煮干しで取りし出汁香る 翔つ鳥の銀色放つ秋の朝 桐一葉朝より流る般若経 さびさびと日の差してある枯葉かな リズム良く刻む組板秋の朝 秋の朝雲の織りなすグラデーション 秋暁や声明洩るる花頭窓 オムレツの卵はいくつ秋の朝 青桐一葉落ちてそのほか何もし 秋の朝あつくらと焼くホットケーキ	恵子	史代	節代	水明熊谷句会（熊谷）	三昧の音のもるる裏店青瓢箪 秋高やかつて馬賊に憧れき 上州の風に瓢の高笑ひ 青ふくべ夢に理想の柳腰 秋高し解斗雲が見付からず 秋高し一句に添ふる祝婚歌 スカイツリーは巨大な支柱天高し	卓郎	風子	秀子	道を	忠男	燈女	栄子				
鼻の差のゴール判定秋高し 窓越しに括れの美しき青瓢 芽吹句会（浦和）	微平	茂子	修	玲子	富子	蛸蛸の会（浦和）	敬老日正客となる野点席 秋出水訪うて見舞の言葉無く 秋出水生家に似たる屋根ひとつ 正門にゆるキヤラ置かれ敬老日 避難所の荷物少なし秋出水 主張する秋たけなはの美術展 秋出水二階の窓に人の影	弘子	久美子	道を	きざきサークル（浦和）	若き日を語り夜長の二人酒 病室の吾子は寝ねしか長き夜 「芝浜」をイヤホンで聞く長き夜 鳥唄を囃す酒場の夜長かな 長き夜や一気に仕上ぐベビー服 追伸に本音を探る夜長かな 指輪旧り抜くに抜けない夜長かな	啓子	俱子	由美子	健和	健司	和子	山菜	光代			
水澄むや池塘に映る燈岳 鶏頭花初老の恋の行き止まり 通り雨炎は冷めぬ鶏頭花 鶏頭や陣の名残りの供養塔	珪子	曆文	きいち	更穂	風舎	蛸蛸の会（浦和）	唐茄子や隣家の塀にもたれをる 老人の日早口遊びはれろれろに 秋日和二人の歩み一つへと 手前みそ南瓜と皿のコラボなり トゥルルと二胡の音沁むる秋夜かな 刃のたたぬ妻の居直り大南瓜 現し身に抗ふ気力秋日和 もふもふと栗飯を食む夜のぬくり スーパーの南瓜を買ふやひとり用 あの花にこの実なるとは栗南瓜 海岸のヒスイを探す秋日和	幸子	幸子	幸子	夏野	秀子	しるく	礼子	元美	月子	宣子	みち	のりこ	小麦	小義	福美	鶴城

若 枝 句 会 (浦和)

稲雀ひと足先に出来を見る
稲雀今年しや豊作小躍りす
収穫をともに待ちわび稲雀
傘閉ぢの松茸飯や香り立つ
人寄せに人が植ゑしし死人花
また一人去りゆく友や曼珠沙華

山 茶 花 (浦和)

年を経て毎日の如夏休み
恐竜展に輝く瞳夏休み

越 後 の 会 (浦和)

子の思ひ母の想ひや秋の海
水平線を落暉が染むる秋の海
コスモスの丘に連写の音響き
無人駅群れて迎ふる赤蜻蛉

俳 句 の 手 ほど き (岩槻)

秋声や師匠ゆづりの均し鉄
訪ひし源氏庭より秋のこゑ
薄れゆく富士の茜や秋の声
土均しを洗ひ武蔵野秋収め
ラーメンの屋台訪ふ秋の声
黎明の己が靴音秋の音

貞代 敏江 みどり 泰子 泰生 美佐子
美江子 マスミ
輝翠 翔太 宣子 真理
延昭 佐江 義子 徹平 翔太 忠男

運動会平均台の上走る

薄日差す団地ひとつそり秋の声

草深き庵を包む秋の声

異国語の飛び交ふ現場秋の音

灰均しの如砂漠に紋を秋の風

露霜に均す白砂の枯山水

朝と夕脱いだり着たり秋の声

秋の声溪の流れも風音も

め だ か 句 会 (浦和)

肩書のとれて新米よそふ朝

月めでて人恋しさが募りけり

新米に力ほどける掌

名月に息呑みそつと手を合はす

残月に吼ゆるも虚し無髯の虎

摩天楼とどこどころに今日の月

名月や棒高跳びのバーの上

三年に一度の出逢ひ月赤銅

新米を迎へ米櫃清められ

名月の名とは何かガリレオよ

メッシー君より新米届きにつこりこ

名月や団子は練れて句は練れず

小 梅 の 会 (浦和)

赤き月東から欠け西の空

空缶を蹴る少年や秋高し

美子 幸代 桂子 知子 卓郎 チアキ かつ子
六弦 莊志 恵美子 和子 眞美子 尚己 楽道 知子 月を 三茅
隆然 隆文

虫の音や故なき怒り鎮めをり

長き夜や真暗な空に背中むけ

九月尽田空仏の微笑かな

あ ゆ み の 会 (浦和)

露草や八十路は涙もろくなり

ままごとのジュースは青き螢草

露草に屈めば風の程ありぬ

瑠璃色に露草光る朝の径

寺を継ぐ若き僧侶の秋彼岸

泰平を生きて八十路や秋彼岸

りんどう俳句会 (浦和)

野分立つ最終便を待つ女

久闊を叙する湯宿の麦とろろ

広重を偲ぶ掛茶屋とろろ汁

空つばの心を埋むる蕎麦の花

電線を悶えさせたる野分かな

空の果て仄かに透けて龍田姫

戸を叩く闇夜に重き野分かな

悪童の群れ来る空地海瀛廻し

麦とろろをすする寡婦の長寿箸

野 ば ら の 会 (浦和)

イベントはおぼけ南瓜の目方当て

割りぬかれ呵呵大笑の南瓜かな

進 恵子 道子 啓子 俱子 靖子 重子 藻好 君夫 順子 翔太 夕峰 徹雄 まりこ 寿夫 風子 卓郎 栄子 秀子

ウオークラリー一等賞は大南瓜
刃を入れて抜き差しならぬ南瓜かな
南瓜採り戯けて真似るカーリング

りそな俳句会 (浦和)

裏木戸に人待ち顔の夕化粧
鶯一羽ちつと動かず下り簾
宿着にて飽かず眺むる下り簾
夕化粧「四時に開けます」モール来る
幾筋の川を一つに下り簾

野菊の会 (与野)

坂の上より富士山望む秋夕焼
底紅の零れて風のあるを知る
鳥達の住む場所は何処台風圏
灯として賛美歌ひびく夜の涼し

櫻蔭句会 (浦和)

いくつもの群るる命や曼珠沙華
天命を知り矩を踏えずに秋麗
命綱友に託すや秋岩場
千の手に命を乗せて風の盆
小雨降る母想ひしや紫苑咲く
天命をつくし朝夕虫の声
命はぐくみ歩む秋の日一步二歩
水担桶に紫苑あふるる村カフェ

夏江
茂子
みき子

マシミ
道を
久美子
建治郎
雅夫

和子
清子
恵子
光子

真理
行雄
公子
茂子
美子
久美子
美智枝
由紀子

ご無沙汰の神社のそばに紫苑咲く
古の逢瀬や夕べ紫苑の野
曲り家に紫苑そよげり遠野郷

繭の会 (浦和)

耐へ難きを耐へし生涯濁り酒
秋の灯にテラスで一句夢心地
秋の灯やシネマを出でて言葉なく
蓑虫の蓑の内なる世界かな
生涯の守戸働きや秋彼岸
秋灯や読破するべし今夜こそ
一生涯夫一筋に敬老日
蓑虫や時を定めて脱皮かな
俳句とは天涯交友あきざくら
秋の灯や妻の湯浴みの音のして
秋の灯や下町はまた賑はひを

千恵
多美子
幸代

風子
夕峰
寿夫
和子
さよ子
伸子
小麥
しょうご
月を
京子
風舎

誤植訂正

十一月号に誤植がありました。慎んでお詫びいたします。四四頁上段

正 灰白き過去へと廻る走馬灯
誤 灰暗き過去へと廻る走馬灯

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
[作品] 5句 [受講料] 1,000円
[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記
③110円切手を同封 ④返信用封筒は不要
⑤締切なしで随時受付
[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

令和8年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。
新人登龍門の趣旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句（表題を付す）
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可
- 締切** 令和8年2月15日（発行所必着）
- 応募方法** 令和8年水明1月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。
尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新春俳句大会のご案内

- [日時] 令和8年2月1日(日曜) 12時45分受付
13時15分投句締切
- [会場] さいたま共済会館5階(501、502)
- [投句] 「冬夕焼」(傍題は「冬茜」及び「寒茜」のみ)
「初鏡」(傍題は「初化粧」のみ)
※ 各々1句ずつ、2句の投句となります。
- [参加費] 1,000円
- [申込] 令和8年1月号に添付の申込用紙で1月20日(火曜)までに参加費と申込書を添えて発行所総務部宛にお願い致します。
- ※ 年当初の俳句大会です。日時をご確認の上奮ってご参加下さい。
- ※ 昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参下さい。

事業部

令和8年度

例会・句会指導者及び幹事の会 開催のお知らせ

今回も新春俳句大会に合わせて、指導者及び幹事の会を開催致します。

各例会および各句会の指導者及び幹事の顔合わせを兼ねて、幹事の役割についての認識を深めて頂くことで、水明俳句会の更なる発展を目指すものです。

万障お繰り合わせの上、是非のご出席をお願い致します。

[日 時] 令和8年2月1日（日曜） 午前10時～11時半

[会 場] 浦和コミセン第14集会室（浦和パルコ10階）

[議 題] ・令和8年度の年間事業計画について
・令和8年度の新運営組織について
・新編集部の体制について
・例会・句会幹事の役割について
・各例会および各句会の開催時間、会場、幹事等の変更があった場合
・各例会および各句会の現状報告及び情報交換

※ 欠席の場合は、代理の出席を立てて下さい。また、その旨を総務部へ連絡をお願い致します。

主 宰 山本鬼之介

幹事長 網野 月を

風 声

○現代俳句十月号——「列島春秋」欄

着流しの藍の角帶菊日和

檜鼻ことは

○現代俳句十月号——「第二回現代俳句『風を詠む』」欄

戦場の名も無き墓に虫時雨

梅澤輝翠

燕帰る空の何処に道しるべ

永野史代

ゆらめきて人の顔する門火かな

檜鼻ことは

○好日（高橋健文主宰）十月号——「受贈誌御礼」欄

籐椅子や夢の旅路の百万里

鬼之介

○雪嶺（石本雪鬼主宰）十・十一・十二月号——「受贈誌」欄

二胡に添ふ猛き尺八別れ霜

鬼之介

月涼しアイヌ民族衣裳館

○暖響（江中真弓選者）十月号——「俳誌散策」欄

渡部健氏により「水明七月号（通卷一一三八号）を鑑賞」

「今月のかな女」として、山本主宰が長谷川かな女の一句

を鑑賞。

子を抱く夫見るうれしふうち草

長谷川かな女

主宰山本鬼之介氏詠「月の夏衣」八句より二句

水亭や江差追分切せつと

みどり濃き窓辺にこそそのノクターン

一句目、北海道江差地方の民謡「江差追分」は当然もの悲しい調子の特徴なのだが、水辺の東屋ではより一層悲しく聞こえるのだろう。また、「切せつと」の措辞がひしひし

と心の中にまで迫る様を巧みに表現している。

二句目、静かな夜の気分を表す抒情的なものと謂われるノクターンを、精神を安定させるみどり濃き窓辺の部屋で聞くことは素晴らしい。現代の世知辛い世の中では贅沢かもしれない。

「季音 雪・月・花」より三句

毀れさうな恋の行方よ櫻貝

永野史代

地下鉄が不意に二階に目借時

近藤徹平

銅葺の反り屋根に散る夏落葉

渋谷さいち

○玉梓（名村早智子）九・十月号「他誌拝見」欄

黒南風を大漁節が迎へ撃つ

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十月号——「諸家近詠」欄

提督の肖像幀と夏館

鬼之介

○波（山田貴世主宰）十月号——「受贈誌展望」欄

田端重彦氏による「水明6月号（通卷一一三七号）」の鑑賞

高浜虚子の高弟で女流俳人の草分けであった長谷川かな女が昭和五年に創刊主宰、昭和四十四年永眠。女流俳壇を牽引した俳人で勲四等宝冠賞、旧浦和市名誉市民で市内に二か所句碑がある。現在は五代目の山本鬼之介が主宰。「気楽に、楽しく俳句に親しんでみませんか」をテーマに全国に三十四の句会があり、九月に創刊九十五周年祝賀会と全国大会が開催される。

【月刊】

毎月表紙裏中央に創刊主宰の一句と主宰が詳細に説明。

梅雨の月高きに隅田川更けし

長谷川かな女

主宰詠「庭景色」八句より

廢屋をむかしに還す濃山吹

山本鬼之介

「季音雪」二十一名の各五句より巻頭句

鳶の足に絡み付く蛇空青し

鳥羽和風

「季音月」二十六名の各五句より巻頭句

牧神も夢路を辿る目借り時

原田秀子

「季音花」二十六名の各五句より巻頭句

組板に王の風格桜鯛

渋谷きいち

「水明集」九十四名の各五句より巻頭句

春浅しシャベル戸口に並ぶ街

寺町知子

「鼓笛集」十九名の各三句より巻頭句

つばくろの旋回二百八十度

石関六弦

「山紫集」八十七名の各一句より

雨に濡れむきだす肋春の鹿

池田雅夫

裏表紙の上段に「水明抄」で主宰が十八名の一句を選句、
下段で水明例会の七会場の日時、場所等を掲載している。

○白鳥（高松文月主宰）第七七号——「受贈俳誌より」欄

番町のとある画廊の夏灯

鬼之介

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和七年十月三十日 — 現在 —

日吉亜弥子	10	口	りんどう忌より	
新 曆 文	10	口	小林京子	1
匿 名	20	口	日高道を	2
星野和葉	10	口	石井喜恵	1
中山厚子	10	口	菊池ひろこ	1
関根千恵	5	口	保坂翔太	1
関西例会	50	口	田中章嘉	1
佐々木史女	10	口	河野はるみ	2
河野はるみ	5	口	岡田宣子	1
			曲淵徹雄	2
			大村節代	1
			反町 修	2
			石関六弦	1
			大塚茂子	2
			越田栄子	2
			梅澤佐江	1
			丸山マスミ	1
			西幅公子	1
			石山かつ子	1
			山岸久美子	1
— 合計 —	155	口		

後記

いよいよ寒くなつてまいりました。十二月号をお届けします。本年最後の号でありますと共に、私達編集部四人も総退陣となります。一月号からは、新進気鋭の方達が「水明」の編集を行つて下さいます。

思えば、星野紗一三代目主宰から私は、「いいかい、この話はこ」とわれないのだよ。」とおっしゃられ、行事部から編集部にトレードされました。

池上貴譽子編集長、星野和葉編集長を経て、編集長をお受けして今に到りました。今に到る間には有能な編集部員の方々が数多くいらして、水明誌発行を支えて下さいました。

一人、二人と出入りした編集部員も、ここ十年位は（石山かつ子・大塚茂子・丸山マズミ・大村節代）の四人で、水明の編集を行つておりました。編集の仕事もツアーカー

で通じる貴重な仲間です。

この間「新仮名遣いか旧仮名遣いか」「水明誌を隔月にしようか」等々の論争があつたり、色々な事がありました。

しかし、わが水明は今年九五年を迎え、祝賀の全国大会を挙行しました。これだけ長く続いているます結社は、俳句会は数多く結社があります。幾つもありません。

新編集部員の編集により一月号からは、今までなしえなかつた毎月一日に水明誌が皆様のお手元に届くようです。

水明の誌面も刷新され、若さが漲る事と思います。会員の皆様には新編集部により生まれ変わった「水明誌」を応援下さるようお願い致します。

長い間ありがとうございました。（かつ子・茂子・マズミ・節代）

今月のはてな？

散居村（さんきょそん）

棕（むく）

摺子木（すりこぎ）

其其（それぞれ）

痴言（おこごと）

父乞虫（ちちこうむし）

括（くび）れ

均し鉄（ならしがね）

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内をお願いします。)

76 75 64 49 47 45 21 19 頁

水明

令和七年十二月号

通巻一四三号

令和七年十二月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区摩西一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分

六、〇〇〇円

同人費

(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費

(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替

〇〇一七〇一〇一九三九三

印刷所

中央美版

発行人

山本鬼之介

印刷所

中央美版

季音 雪・月・花

三月号 十二月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏 名 (俳 号)

題

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名つかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先 (電話番号)

氏名 (本名)

年齢

歳

水
明
集

三
月
号
十二
月
十五
日
締
切

都・市・町名

都 市 町

氏
名
(
排
号
)

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

山紫集

三月号 十二月十五日締切

氏名(俳号)

三月の兼題

「冬霞」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

季音抄

山本鬼之介

秋簾巻く手に残る日の温み
衣被湯気もろともに供へけり
海渡る蝶の群がる藤袴
秋草や無茶を承知のマキューシオ
日の名残り風の名残りや秋簾
一つ灯を分かつ者なし夜の長し
箱馬車の轍恋しや赤とんぼ
「項羽」今四面楚歌なり秋灯下
九月尽人も草木も再起動
花言葉添へて文書く十三夜
五湖の色みな殊にして秋暮るる
身に沁むや地図より消えし父母の里
秋高し機影に確とJALマーク
野分立つ最終便を待つ女
抜け殻となりし集落藪からし
夕露や廃駅にある時刻板
新秋や乗つてみたきは舳斗雲
盃のお多福揺るる良夜かな

茂木和子
森川義子
森本早苗
網野月を
石井喜恵
井上燈女
青木鶴城
大場順子
日高道を
梅澤佐江
松宮保人
丸山マスマ
笹本啓子
横山君夫
保坂翔太
渋谷きいち
染谷風子
鈴木玲子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるつてお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に
鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 競 詠

山 本 鬼 之 介

唐辛子孤食の舌を刺しにくる
声太き犬の影絵の夜長かな
並縫ひの針目ととのひたる夜長
長き夜や沖に崩るる波の音
かの国の「恨」の色とも鷹の爪
おんぼろの南京玉すだれ秋夜
唐辛子は辛し摺子木は辛し
唐辛子育ててをりぬ魔女の爪
立待や京友禪の舞妓来る
さりげなく来し方語る夜長かな
時代祭の牛車の姫の京化粧
秋扇持つ仕草佳き京男
長き夜を刻む昭和の古時計
家系図を囲めば長き夜となりぬ
長き夜やモディリアーニの長き頸
長き夜を琴弾き通す埴輪の手
鉄を切る火花に呼応唐辛子
長き夜や見入る我が町鳥瞰図
長き夜やひらりと孤独しのび寄る
京都市左京区彼の人住める秋日和

松井由紀子
菅原卓郎
石川理恵
石井喜恵
五明昇
網野月を
日高道を
茂木和子
保坂翔太
大村節代
石山かつ子
小林京子
大場順子
横山君夫
境延昭
丸山マシミ
大橋勉代
星野和葉
霜多光代
永野史代

水 明 例 会 案 内	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇雄 曲淵徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 石反町修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗